

花月句集

第二卷 第二號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和二十年十二月一日(每月一回)發行



昭和二十年十一月廿五日印刷納本

十二月號

俳句 日本作品

秋山秋紅蓼

路に萩のある風のあるやま
奥に畑がある山の踏みえてひぐらし
ことし山に住み十五夜のわが山を見る
もう秋が木を吹いてゆくことから
風に 月が 澄み みる
疎開先から桐の箆筒がもどるなど 麥青い

柳田流矢

賞弟葬送

茗荷の子ひと七日ふた七日と寒くなる
學童落葉掃いてもうちき東京へもどる
まだこない風のたよりもない落葉が毎日
日が出て刈りとほり雨とほりて刈る
月はこれからの、浪音の、砂にひとりではない
雨がばれさうな青空がある青田踏切小原
青田の、早稲はもう穂が出てゐる道の、道山
はじまるにまだまのあるらしいうちはと切符のはんぶん
いちにち一度のはがきいちまいきた木櫃のはな
馬鈴薯伸びた土の悠々とすなはち猫
子の呼ぶ子の走ること 葭切雨じうの
宵より月の八月の盆明日と言つて(計)
うかつゆふがほの瓢箪化してゆくちふ(病妻)
蛙山の雪解けるや 聲々

稲垣一鳴

田中井夢

すずきゆきひと

宇野彖録

照井稗人

關口比呂志

園木六食子

森谷乙山

伊藤柳江

悼台水

あへなきを朝顔さかりの露しげくして
茄子親子のその小粒拵る井出に漁りあり
この誌懐くうける、西國終戦やがての口
二人甘藷堀りに出る學徒まだ兵を語りたひ連
夜々繩なひ胡坐に脣おかずわが初心者
とぼしき母子薪負ふ頃となり捷報はたえ
山脈の突端削つてゐる流みて生活苦うちあけられ
禿と激論の茶店である胡麻の實が乾してある
お彼岸だとして小女の頭から古風な油の匂がして
拾月山風南天に吹く笑つてゐる子供

マスケした子供が下り發車姚捨の驛
日本晴れ日本阿蘇かけてみのる栗赤く
終戦くらすこる葉あかき栗を日いで
國原雲あかれ栗柄垣に凭れてこども
そらのいろふるさと種栗掛けし葎の檐端も
堯に水をみたしはつきり栗柄垣の月夜に

還りて

母ひとり南瓜の雄花をつむでおられる丸腰で還り
いつときは據にゐて散るもの冬の木木
草露を踏みつ躡るひもろぎの邦日本
糸瓜が生つた小言ちつともいばなくなつたぢいさん
こゝよりみち岐れ鹽釜さまへ詣る草の蔓垂れ
わがかへりを襲ふとんぼ虎斑ある胴體
いづ方も雲こごし穗出づるまへの稻田
國土みな懺悔海青き暮秋にして
磯山霧深し波ひたひたに漕ぐ舟ありて
揺れる舟にして釣上る薫にもものいふ男
國艱難鷗鳥羽音なく飛入である水面
また向寒水美しき池ありてくらし
終戦事務しかじか風ありて穂草
女さながらにふけ紫蘇の實を集む
とかうしてわがくらし茄子の木をぬく
出來沙魚透明これをあぶる三尾
もの乏し蕎麥の花さきし道のべ
握り飯をかみしめ鐘樓に塔に秋の日

林 さあを

西垣 碧禪

細谷 不句

安齋 櫻 砲子

妹尾 美雄

高橋 晩甘
岡田 葵雨城

織部茶碗添へある寛秋の山澄み

この日一日秋の日の仕事終れり大樹を仰ぐ
驛を出て見知らぬ方へゆく氣持みちの蕎麥の花
もみぢの水の間あるくひと木の間をいづる
雨ふるそのへん雨水たまるかまつか立つを
しろい霜がきえない戸口に捕はれし一人
淺春枝川上り行く人の聲ひびく
朝半は木につながれて居る霞はれてくる
母と居り松落葉かく春の海のいろ
辛夷さく丘から丘ひとり行く丘
春寒く田圃來て登山口水をのむ
やばらかな地に植ふるいもの細い蔓
疳癢おこすでない縞の細かい方のセルを着よう
水鷄近く來啼いたけさの木々
桑の實赤き見る峽に入る二人
麥小東にし裏返す麥重たき穂首
萩の花ある叢に身沈むおもひ雨あと
黒いばつたとぶ草なか雨あとの水ある徑
藁を採りに來てゐるひとりにて朝に池のべ
藜蔓を籠一つに貰ひ來たる雨の日
百日紅残りの花の隣りと低い土塀
厨口青い草の明り産湯を沸かす
肌膚のことを野菊の花澄むことを云ひ妻が安産
大きいほうの子を連れ冷ゆる野の星を見せてゐる
踏み込む溝が淺いのでみぞそばの花で

福島 一思

淺野 麗木

松宮 寒骨

宮林 釜村

長屋 青橙

加々 美青河

わが栖む窓たかからず茶の花が咲く
十五夜さまさうしてこれは家にある一つの右摺白
南瓜棚の南瓜を下すにもきこえ川の音
コスモスが手にゆら／＼して墓參のその人
桐の實など子供らふんで遊び雨上つたみち
いちじくもいで食ふ子にいちんち乾かない庭土
どうにも空が青くて櫛の木に枯るゝはぜの實
家に煙突があり雪空がみえて人々
栗を大きい小さいの包から出してとるこ女の兎
日が山に入る家にて秋の日妻と
大根まく私にそこについて来てをる子供
水あり今日公魚解禁のみづうみ
ばつた生きて飛ぶ水は流れてひかり
こどもに草がそして青いかまきりがうごく
畑を作りこれは葱苗芽を出してうごかない
みんな草を食うべ山にて人に山の風吹く
秋の日本水のいろ地のいろ晴れしいばほ
いれ倒れそこから野菊の道に出づ
いれの穂の重さくるにいこふ冷え
いれ水つかかりいれの光立つ朝
われにいのちあり川原蓬が枯れし
農具そろはねど大根蒔く鹽菜を蒔く朝
鮎の下るには早い水のいろ蒼い洗湯
枝豆枝ごと茹でて復員の一人をかこみ
山中巖を負ふ一字のもみぢ

九貫十中花

谷 しんいち

山田蒲公英

山田宗作

蓬萊鶯郎

こゝに櫻を植ゑ熊笹を植ゑしめ櫛の實
屋根へ葛蒲を挿し一軒本當に一軒
郭公 鳴く水田一枚一枚
郭公 鳴く 暮昏く なり
とても栗の花にほひ馬の歩む聲音
古詩叫びたく日没の露下りし
胡麻油實入ると低い山々を霧らせる白い雲
秋日は川の底に石の澄みやうを流れる
道は大らかな秋山を朝ゆく道
提灯一つで池のふりにふる雨
柿の木二階から見送られて橋のある道
朝の目食卓までさしてきて秋茄子のいろ
それからまだ夢のさめきらぬやうな山吹の返り咲(終戦)
戻つて裾の草の實が秋がけふも昏れてくる
どうやら颯風もそれたらしい茄子はまだ咲いてむらさき
あかるく秋の陽が竹林の中流るる水
赤い芽眞赤く青い芽眞青くてことしも夏
開くと牡丹の一輪の開きつつ揺れる
水に蓄み水を抜きま白くて咲く
飛橋は鑿ちて出た月が梅雨のはれま
庭木に音立てて無月の雨の音又降る
歸郷して浴衣着て小さな花が毎朝咲く
鳥があるいてゐるだけの道のまひる
月がまひるのやうな猪おどしのてつぼう
胡麻の花今日はこちらの道を行きましよ

池田亞杜子

小谷信夫

青木菁華

木戸夢郎

財馬阿歩

水鏡に鳥の蔓が伸びてきて涼しい
 しろい芍薬に蟻が這つてゐる赤い芍薬にも朝
 疎開兒としてすこれ瘦せてあが子が蛙釣つてゐた
 奉安庫の菊の御紋章も深雪となりある
 深雪の洩れ日がホツとあかるくなりてでつびん
 雪 こゝんなとこゝろに一軒
 開け放つとまだ寒い夜の白梅
 爆音入りみだれ遠のき霜よげ笹日ざし
 生徒さん菜畑を曲ると先生桑畠の陰になつてゆく
 飼猫朝の畑におりてゐるトマトがまた青い
 唐黍空へ吹かれてゐる丘の青空へ出る
 山も冬近く寄り添つて四五軒火の見の下
 音立てて雨落葉松林訪へば灯して明るくする
 萩の雨しちりん煙らすことをしてゐる
 黙つてからす落葉松林が昏れてくる
 けふ白根の晴れベンチだけの停留所紅葉
 無花果牛の聲 朝すがすがしがし
 高千穂の峰、煙草の花は丈高く咲く
 曇さもげふから下り坂といつたひぐらし鳴く
 鶏放し飼ひして木屐しぼんでば落ちる
 夏が秋になる毎日夕陽兵隊みんな歸つてくる
 どん栗落ちてゐる此道のお地藏さまが近道
 泊り重ねて来てここに葡萄の房長し
 疎開兒たち箒をもちなつめの木のなつめが秋はれ
 唐辛赤くなつて残してくにへ歸るといふ夫婦で

和田光利

古林巴水樓

原 農 平

杉田作郎

堀 英之助

三好叢一路

木村縁平

吉田六郎

池田詩外樓

池原魚眠洞

秋雨夜につづいてふり一途にふるそんな晩の句
 いつも御飯戴く時も農林學校の建物雨降る
 降れば降るですする事もない身で石臼の穴
 ふるさとは唐がらしと茄子をざるに持つてきてくれた朝
 二三日は古里の言葉が秋の雨ふりつめてゐる
 二階を借りてたつた一つある窓の秋の山かな
 灣の奥にも白い浪立ち麥蒔くこのへん
 ひとつのこつてゐる柿の木の前より火鉢にゐる
 近藤次良に
 雪ノ晩今晩籬の前で草鞋作つてゐるか
 冬至にならないうちから来る日が藪の藪うぐひす
 このごろ夜は月がきれいでお隣の畑豆の芽
 坂道、ふつと木犀の香に海が光つてゐたり
 滴々事主人
 とてふてふが、そんな日のお店でなくば畑で裸で
 秋暑いがアドの影にてふてふ何か賣つてゐる
 わくととき雲かげうつりゆく枯田に坐り
 陽がかけると山の巒が濃いばかり冬近い瀬音で
 煙草一本三つに切つて暑い二階にひとりゐる
 もぐときおちしやのほひ六月の日ざしちしやばたけ
 里芋四五株畑からあすは祭の太鼓鳴るにて
 そとから戻つて祭の太鼓うちでも聞いてゐる
 復員未だ支那にある子のことなどを毎日あめ
 風が逆さに流してゐる川の藪に上しり橋があると渡る
 水すまし洗ふ下駄水に浮かせておく

赤い蓮で日ざかり家があつてひっそりしてある
 巖山に小松など蟬の遠いこゑがすずしくして朝
 川は川音するばかり日ざかり
 秋が夕月米軍進駐の回覽板です
 道に咲いてゐる手にしてゆく
 けふからは灯をもらしてもよるしい竹の葉
 朝がぐつと涼しい一りんこツプのはな
 戦ひかくて終り盆の大豆選ることか
 河原も畠橋の袂アメリカ歩哨がゐて秋晴れ

龍洞訪問

かなかなや味噌はいたゞいて歸ります
 月夜明るく平和産業の夜業の音してゐる
 丘のうへ朝日を銀輪に學徒數人連れて通り芒の穂
 伊東にて

宿の傘さして外湯にゆく青い蜜柑の雨
 上り下りが停車してさくらもみちのちらちら散り
 杉立ふかく雨神の白鷄あるく
 百穂の山川そのままの、口笛ふいて行く
 月夜の看護婦室から木琴、軍歌
 門口實りの田圃に開け出る毎に實り
 ふりかけると底わけにふる松の枝松の木
 かげると涼しい少年少女びまの實とつてゐる
 日も日も裸で體操向日葵みになる
 天の川のやうなシュラルミンに星のやうなベウをうち夜がふけると
 朝月と畑中の桐の木が一本瘻があく

鈴木蜻郎

東松八洲雄

大越吾亦紅

鈴木折嶺

秋の日山道が旋がまの前へ出てきた蝶々 井手逸郎

里におりて山の子が學校へゆくみちのまんじゆさげ
 ひたひたと満ちて満ち沙のにはひがいちじくの木のある道
 ささげのはたけがあり夏の日ざかり家のすたれのまへにある道
 はれつるべの上つてゐるのが鹽田の鹽籠へとほつてゐる道
 ひとり煮豆一つ一つはさみ雪のしづく

小川都影

すでに逃ぐる人の列焰の中木の立ちてゐる
 焼けた朝が白んでくる顔と顔水くみに來る
 星が出るよ夜になる焼跡の跡にもぐる
 灰から掘出したものを手に雨となれば春雨
 雲へ星がちらばつた

高橋良太郎

障子はれおとがすずめたけやぶ
 唐鷄けさははたけの土あるくにて
 馬が知つてゐる家の見えあつてゆく春夕べ
 このころひけてきてしばらくはあかるいむめのはな
 うちの冬着の木も實をもつと北鎌倉はどちらも山
 耕せば秋の陽炎學校農園書がまぢかな
 きんもくせい、教へ子復員の挨拶に來てゐる
 月夜のむくげが白く外から聲かけて通る
 朝石をまともに少女手に菊もつて登校です
 床屋さんひげ剃つてゐますお幸の配給です
 帯の女もちらほら櫻並木と赤い鳥居と小春らしく
 花屋さんけふから店びらきしまして明治節の子供たち
 わたしもきせるで句の話、芋の葉も食へるといふ話
 雲のうつるのも冬らしくて水、棲む魚はゐる

巢山鳴雨

石田白蓮子

漬菜の拵へを、する、うすい霜の朝
柿がなり柿が色づき妻や子と離れ暮して
鼓をおもふその花瓶のコスモスに午後の日聞け
甘藷がくさる匂ひ漂ふ烟を柔烟を覆ふ出水

佛印にて四句

おもへば炎天鹽辛き魚介をくらひ
炎天見るものに枇杷の花と天翔ける鳥
男が来て女が来てそんな裏山で蟬が鳴くだけの漬
女人秋原へうつゝなり炎天枇杷の花鹽つ
水を満たし夏夜の菜畑こゑなく
山の宿に在れば夏夜の獵銃を置く
みづながるゝなにごともない夏の河の朝
松原へ入る松げら夏夕べの地の土
つゆぐも北の山にたれ半ば草喰ふ
その夜冷たき酒に酔ひ蚊帳に入りたり
灯のもと笹の杵をとりとくふすこし滯れしを
秋空あをき山々は高しつよく生きなむ
牛がうごく人がうごく日出づるまへの霜地
いま西の方にある太陽と背高い紫苑の花
雞は雞屋を飛びだしたくてある日向秋菜の畠
よほど冷ゆる夜を星をたしかに見ようとする
仔馬にふれて見たくて野のクローバの花
黄菊一二輪北の果にきて、棲みて庭に
木賊手に二三本ぬいてきた朝の渡しを渡る
子どもの籠を軒につり山は展けて秋の日

根岸榮一郎

梶田羊介

相澤華芳

小林満豆斗

守矢自由也

今川溪花

柿が熟れてきた學童窓に机に居る
石白畑中に据ゑ虫喰ひ大根葉
秋朝四つ手網ひく小さい石橋にすわり
沖遠くまで沙ひいて沖に鯉掘る人々
どこも草の穂雨の日の一つ家の屋根
晴れて林が乾いてくる感じ木の苔の花
秋の日あるとき窓がうかかぬと見る一つの窓
秋の日山みち石ばかり夫婦がゆくその影
麥を刈る畠から海からの風
べたべたはだし蜻蛉とんで
芒たてゝ晝の人あらぬ机
霧はれてくる話まだある
鎌を手にし黍畑に入る人麥を没し
夜の築小屋の戸口霧流れる鮎を焼く
拾つた粟の粒が小さい子供幼い
男除蟲液をまく大根畑青く空ふかし
雲は正常に飛び秋芽など目にならなく
蔓草の厭げしからず今日相會ふ日中
お濠の水深いと思ふその事に秋日たのしく
清淨すゝきの丘一片の雲
三時頃の日なた日かげのおぼげ草
野へへおくる野べの一つ遅いたんぼ(母死去)
山冷えく身に枕をよせて
そんな感情と別にアカシヤ白い花で咲いて
雲ひろく雨止んだ無花果をもぐ

中原我樂

武居泊雨川

木内柳陀

松宮磨研

佐々木 四雨樓

三國屋白雀

堀川屈人

雨は長く降ると思ふ雨量秋草
 見た目其邊秋蒔のもの大雨にうたれ
 秋草ふまないところひろし山へ登る
 秋の日さうして向ふの竹藪にくろい飛ぶ鳥
 風なほやまず親子へ秋菜畑へある道
 道に橋あり雨がみえてゐる吾亦紅一叢
 山峽秋のいるときに人に遇ふこともに遇ふ
 麥蒔する人ら聲たかく山畑にして
 草枯れてゆくみち荷車力一杯にひく
 小茶汁の小茶のほひ今日仕事の段取
 四年ぶり着流しの句蓮韭の花の鹽漬
 丸腰將校よそびとでない挨拶で秋身に入む
 復員の兵隊さん小島のあなたの眼白放ちました
 母のための雲隠の力綱いよよ冬任度に入る
 工場解散秋草自から實を持ち
 山は大きく晴れゆくゆく秋風
 また一ぶく喫つて考へてしまふ日本の青空
 冬祭る地の神々雪の下の青草
 牡丹餅を呉れし秋の運動會が雨ふり
 松茸を置り栗をほかりこの夜更けてしまひ
 遠景障子あかく灯したるそこらそばの花
 雑木紅葉してこの山の鳥雑木紅葉の中をなく
 外籠に踞むともう秋風なり落葉する樹
 味噌汗鼻先にきて英語講座の膝をかえる
 海風いでゐる芒穂に出て崖上の洋館

林 鷺水城

保田重藏

島田啓生

南畝三坡

榑田東谷

平井青三

鈴木梅宇人
佐藤鳴風子

霧り吹く波頭朝から變らぬ海
 うなじおとなし馬のかへり路黍の穂と垂り
 案山子の懃かな貌に日の稻穂がさ搖れ
 黴臭い父の若い幘子をかぶつて見たり時雨の土藏
 岳の荒めく黍穀焼く
 人想ふ寂び村の子のまへでは黍を愛づとす
 湯霧岩からのひた土崩が二々筋小谷
 子供ばかりがわたしへ微笑む山町での思と紙燃す
 泥流れた岩窪からも屋根揚げた村
 水底の落葉も雑魚と水は流れてゐる
 煙草の不自由の一本を切つて喫む稻刈り
 甘藷掘る親子にて牛は野に吼ゆる
 兜鍋天下泰平の稻の秋で
 白樺の夕暮れ秋、穂高は只大
 元文大正の押出し秋灼けて焼岳
 圓い木の實鍋釜座を背負つて引越さう
 諸と丸粒の麥半椀腹はふくれず
 稻は田は流れて滔々濁流は夜となる
 舂のゐない川幅いつばいの雨つぶ
 信り書く樂しさもつ柿ひとつある卓で
 土にうつる自分の影が秋になつてゐる
 土境の櫻の葉が淋しく稻刈つて束ねた
 掛稻をしたお寺の中が通りぬけられる午あがり
 川を生ふ草を薙ぐ男二人が川筋の水うごく
 鳥群れて行く稻掛ける穂の軽さを

川口三角洲
伊藤水穂

早川昇

泉大畹

上條無庵

松尾十樹

吉澤稻市

會田保男

裏の青栗を欲がる子町の子
白菊汚れをしない憶ひはかなしくなる

秋來る伊那に待ちたり人を十藏山三峯瀬も
敗戦今日も降る二百十日頭にかかり來る霧

蕎麥播くま盡山ははだけしと眩ゆ
運びての灯秋蚊のそちこちするを寢て居れば(病む)

復眞嫌のなくうち庭は小さくてある
山の湯雨になる稻の穂の棚田棚田とみのり

お寺の風呂は算から秋夕べ泊められてゐる
沖は時雨雲の速くて池の畔萩咲く

船のマストが沈んである松の間秋雨晴れ間
熱れ稻、一つ家は菫簾張りなくぐり

空しく軍帽ぬいで歸へつてきて種をまく土堀る
終戦の父は歸へつて子と寝る青い蚊帳

屍跡瓦を運ぶひと木の芽ぶく
苦境はつきり風が肋骨を吹くのを吹かれ

秋風が吹いてペラッが建つ人の灯
明日はカラリか清澄つくべく秋硝子の灯

鶏頭花そのもえ立ちぞ甲斐に入りふかむ
吾子達いかに蠶飼ひから又收獲期いたる(疎開)

八ヶ岳が晴れがま桑秀が露と秋諏訪の旅
さあ今朝歸へる購音のきほひ晴れつづきなる

白雲地に湧いて山肌にくく東雲冷えく
豆引き時雨ては一荷とし土間に

まだき水車米ついでゐるこれを食ふこの里二郷

中山百姓

池上耕山

池上あつ志

松金董順

中村倉次

井上一二

原 鈴 華

朝倉九鶴子

渡部嫁ヶ君

秋市終り欄畑馬小屋馬の匂ひ残り
麥蒔となる野に焚いて敷藁枯蔓ともに

甘藷煮るに母ありけふの山色
新秋月が出てゐる、長い、列車

梅實を落とし葉を落とし少女ら
月出て我らが茄子畑いちめんの月影

山あれば山道あり我らが解放とこの秋空
秋田八郎湯のほとりなる曾祖母のもと

に疎開したる幼児死す、船越にて五句

あかまんが好きであつたお骨になつて歸つて道
おまも星を見てゐたのか秋が冷えてくる星の星

佛の日とて食べるとて菊をつんでゐて日があたたかくなる
來ればいつも坐る私の座のありふちうつる火である

かなしくてきのふさびしくてけふは汽車にのる
玉蜀黍一つを探り葉ずれする風の中

七人が寝る一室の蚊帳吊つて水車真近し
秋を感じ釣り落すことの多き川の緩漫

兎くさ喰ふ音の露草喰ひつくす
耕土冷える新しき藁草履をばく

池水の濁り鯉の児産れてそだつこの秋
一艸幼な兒と頒ち無花果やばらかしがばし

友が呉れて壺に挿す赤のまんまと水引の花と
鶏も家族のやうな表情をんどり漸くとき大きく

世界いびつな氣持秋夜一人の友たちとをり
牛がよだれこぼして行く地にペンペン草

若林乙吉

伊東俊

細木原青起

南 晴 星

内 田 南 師

子供に雨が降つて来てもう痛まない曼珠沙華
 小鳥けんけん鳴くもあり朝日の匂ふ栗山
 山の木々栗の木から裸になつてくる秋晴れ
 あの音は雲の迅い湖へ栢の葉が鳴る
 爽涼著すにしまつた帷子がたゞんだまゝ
 葉のある梅もどきなりまだ護戸である
 芙蓉日々に咲くに怠りて寫經の机
 とまれ胡麻のみのりを穫りいそぐ墟へぬく
 雲益々秋今ぞ胸張つてあるけ行人
 陸奥恐山の北麓に紅葉の美しき處あり
 と附きて尋ね行く、大畑より營林局の

トロツコ道あり

川と紅葉と、トロ道は笛ふいて通るトロに譲り

薬研潭といふに温泉あり

これが宿であらう晝は紅葉に犬が二匹
 栗ととの實も少し干して温泉は川までおりる

湯の脱に至りて風景更に佳なり

犬の皮着て犬つれて土に紅葉が雨ばれて

其夜、古畑旅館にて

月夜は雲もなく山の湯宿の寒い菜ばたけ
 空についでいて海冬めく小舟のかたち
 草と日々を草冷えて来るわが家
 家々の前をとほりずるき満載の一車
 四方よりこども歸る菜畑冬を迎ふる
 夜が明けて来る傾きて栗の木の林

喜谷 六花

萩原井泉水

中塚 一碧樓

西山を晴れまつたく地に落ちた落葉をみゐる

西垣出禪子

灯が練馬村の畑の廣い村の兎ついでくる

晝をれたる人ゑがく人墨繪の苺の花をかきなどして秋日

これを記念石と草の間杉の實生を

徹て十徳も出づこのかたの床に一枝をさす

指導する道

萩原井泉水

「指導」といふ言葉が社會と文化との全面に通じて一種の優越感をもつて使用されるやうになつたのは、大東亞戰爭以後のことである。勿論「指導」といふ言葉そのものは明治時代からあるが、それは主として教育上及び倫理上に用ひられたものに過ぎなかつた。それが今日では、國家意識乃至人間生活の上で、何にでも通じて、軍隊的の強力味をも加味して用ひられてゐる感がある。此事が好い事が悪い事か、といふことを愛に問題とするのではない。「指導」といふ言葉が斯様に、その意義内容の繁達を來したことに、時代であり、時局であり、時相である。いや、單に時運に乘じて成り上つたのみとは云へない。此言葉の内容にある精神が磨き出され、光り出したものであらう。さうであつてこそ、當今此の言葉に權威が感じられるのである。其と共に此の言葉、即ち「指導」といふことの性格、方法、理念等をよくよく吟味して、其の本質的な有りやうに於て、其が正當に行爲せられなくてはなるまい。問題とするのは

其點である。

此の話の間口を不必要に擴げない爲に、又、談を小むづかしく抽象化しない爲に、卑近な事から話を進めよう。去年の秋、私は長野縣の或る農村に於ける知人の許をおとつた。但し、俳句の道の同人ではない。其人は翼壯青年團の支部長をしてゐて、農村青年の指導に全力をそいでゐた。彼が云ふに、自分は俳句は好く知らないけれども、農村青年を指導する上に、俳句といふものはきつと好いと思ふから、一晚、彼等の爲に俳句の談をして貰ひたい、自分も聴きたい、と。そこで私は、近來、俳句に就て普通に説かれてゐる健全娛樂の效用を此の人も期待してゐるのだからかと思つた。つまり、農村には當今娛樂といふものが無いから、その娛樂として俳句を興へよう、是ならば不健全な娛樂に趨ることをも防げるといふことであつて、當今地方の俳句といふものは此程度で、普及されつゝある。俳句の道の本質から云へば、ずゑん卑俗な、いはゞ月並風の考へである。だが、なほ彼の云ふところを聞いてみると、さうではなくて、彼の考へもつと進んでゐるのだつた。彼が云ふのに——自分は大は國家の爲に、小は農村の爲に、青年の理想や本分を説いて、此の時局下の青年として有るべきやうに指導することを努めてゐる。青年は好く理解してくれるやうだし、又、相當に實踐してもらへる。だが、それは「あたま」だけで理解してゐるので、「ナルホドさうせねばなるまい」といふ氣持で實行はするけれども、お互の心の底から「斯うすべきだ」といふ盛り上げる氣持で協力するのとはどうも違ふ。だから、青年達の「人間ごころ」といふか、「情味」といふか、「たましひ」といふか、鬼に角青年達の内部にある「まごころ」といふものに點火することが必要だとしみてゐる。それには俳句がいゝのではないか。俳句は人間の「まごころ」を基礎としたものではないかと考へたからである、と。私は

彼の此の考を聽いて云つた。それは好いところへ氣が付かれた。青年達を集めてください、談をしてあげようと。さうして彼には、次のやうに云つた。——

「馬を曳くには、馬の前から綱を引かにならん、牛を歩かせるには牛の後ろから追つた方がいゝ。指導といふものは一樣には出來ない。そこで、人間を指導するには前から曳いても、後ろから追つてもいけない、人間の中からしなけりやいけない、つまり人間の腹の中にはいふことですよ」

最近「朝日グラフ」誌上で、下村湖人民の「藤樹的なるもの」といふ時局隨想を一讀して、大に我意を得たる思ひがあつた。其要點を抜き書きして置らう。

私(下村湖人民)は方々の農村を視察していつも感ずることだが、首腦者の村民指導のやり方には、大別して二つの傾向があるやうに思ふ。

その一つは「村」と「村民」とを結びつけようとする行き方であり、もう一つは「村民」と「村民」とを結びつけようとする行き方である。前者は常に村民の愛國心、愛郷心に訴へ、公的觀念を強調して、公けのために村民の奮氣を促さうとするのであるが、後者はどちらかといふと、家庭や難保の和樂、互助、協力に力を注ぎ、出來る限り自然な人間感情を重んじて、それを基礎に全體的成果を収めようとするのである。

ところで、この時局下において、生産、供出、貯蓄等の國家的任務をはじめ、各種の公的任務の遂行にいささかの滯滞も示さず、道義的にも經濟的にも、最も徳實な歩みをつとけてゐる農村は、果していづれの傾向の農村に多いかといふと、少くとも私の知る限りでは後者に多いやうに思ふ。

それに對しては、私は、私がこれまでに會つたかぎりのすぐれた農村の首腦者たちは、すべて吉田松陰的であるよりも、より多く中江藤樹的であつた、といふことである。

湖人氏は「それはお前の主観だといふ人があるかも知れないが……」と斷言的に論定することを遠慮してなられるけれども、氏の觀察は當を得てあると私は思ふ。吉田松陰的に、第一に理想を掲げ、己れが其の尖端に立つて指導するといふことも立派なことであるけれども、實際の效果といふ點では、中江藤樹的に、靜に郷黨の間に身を没入して、黙々としてたゞ行ふといふことの方が本質的に好き指導の實を擧げるものなのである。

此事は、一般的に指導の道が如何に有るべきものかといふことを示唆する。之を大にして云へば、國家社會を指導する道に就てである。又、これを小にして云へば、我々の俳句の道を指導する方法も亦、これと同じである。そこで私は進んで思ふに、此の俳句の道の指導方法といふものは、世事時局一般の指導方法としても同様に當てはまるのではないかといふ事である。即ち、一般に指導といふものは、内部からしなければならぬ、外部から掛け聲をかけて引きまはさうとしたものではない。それは「指導」ではなくて單なる「指揮」に過ぎない。又、或る一つの型を置いて、それを教へ込むといふ風な指導の方法は「指南」といふ言葉に相應するものであつて、正しい意味での「指導」ではない。一時所謂時局精神指導者と云はれた人々の大多數は此の種の指揮者や指南者であつて、本當の指導といふ言葉に値する指導者が如何に少いかといふことは嘆ばしいとさへ感じられるのである。先頃、翼壯團長會議の席上に於て、緒方團長が訓示した言葉の中に、先づ指導者の謙虛なる態度をすゝめ、型に捉はれる運動を採るなと戒め、さうして「机上の理論や、

思ひあがつた指導者態度による掛聲」を不可なりとして黙々たる實踐」の必要なることを強調したことは、是れ亦、大に我意を得たるところである。

終に、私の云ふ所を一言にして云へば、逆説的に聞かせるかも知れないが――

好き指導とは強て指導しようとしないうことである。

といふに盡きる。と云つて、自由主義的に放任せよといふのではない。人間は馬や牛とは違ふ。まして、精神的の仕事と肉體的の作業とは違ふ。其人の心の内なるものを啓いて、之を正しく引き出すといふことである。外から引つづつて連れて行くことではない。獨逸語の *ausziehen* ——これは「教育」と云つてゐるが、此の言葉の持つ心持こそ、本當の指導の道である。

新俳句論研考 (九)

新俳句精神と寫實に就いて(終)

西垣 卍 禪子

定型と非定型俳句との立場の相異

ところで、詩を、既につくられたもの、作品を中心として考察する態度と、つくられるもの、として考察する態度とは、當然價値の成立條件が相違することを知らねばならぬ。作品はつくる行爲の結果であるからつくる行爲なくして作品が成立しない事は明白である。

然るに、上述の「ありのままを寫す」に於ける混亂の如く、つくる行爲を行爲しながら、それを自覺しないで、單にできるものと思惟する所から混亂が生ずる。作品第一主義眞信者の多くは、できるもの(作品)を主として、つくるもの(方法)としてそれを考へない所に混亂の原因がある。

これを價值論としてみるならば、作者が意識しない俳句行爲が、作品としてやはり價值をもつと云ふのは、それは觀察者の批評行爲によつて生ずるもので、その價值は、作者自身に屬するものではない、つまり、さうゆう價值は無批判的價值であり、觀察者に於いて相對的價值に他ならない。

従つて、かかる發生的法方論による俳人は、常に相對的價值による批判者が別にあるとする功利的態度と考へればならぬ。然し、よく考へてみると、さうゆう俳人でも全然價值行爲を度外視してゐるものではない。自分が自覺しないだけで、發生的方法論者でも價值批判的行爲はもつてゐるのである。

一方、鑑賞者の相對的批判者が、その對象たる作品の價值を批判するには、作家の詩的行爲、即ち價值行爲の方法論に言及しなければならぬ。彼は作者の方法論以上に到達することはとうてい不可能である。

これに反し、我々に於ける創造的な價值は、俳句の行爲者が、方法論によつて自覺する批判的行爲であるから、ここでは、價值は行爲者たる作者が、自らこれに與へる價值そのものに外ならぬ。即ち、かかる藝術行爲は、ホエシイの行爲、或は批判的方法論であつて、價值論としては純粹的價值、或は絶對的價值に遑入るものである。

されば、「ありのままを寫す」と云ふ事に就いても、これが主觀的の自己に屬するものとして、單に衝動的若しくは欲求的行爲と考へられる時は

單なる衝動的行爲は——抽象的な物理的作用が、具體的な自己との關係に於いてみられる時行爲と云ふことである。行爲がなほ物理的作用に附着して全く自己の積極的内容をもたない時は、普通これを感覺と稱する。つまり、感覺は自己の感覺でありながら、全く他の觸發により發生するのである——物理的作用の單なる自然によつて限定される自己行爲であるから、單なる衝動的自己に固執する限り、そこでは自己となるか物となるかのいづれかを選ばなければならぬ。

従つて、この「ありのままを寫す」と云ふことを、もし單に、自己の自發的限定をうげう、即ち自己を殺すことであるとすれば、自己を限定するものは、一つの「物力」に過ぎずして、自己もまた結局單なる物と化することになる。

かくの如く、物理的な働きは他の働きが設定せられて、始めてその方向を限定せられるものであるから、物理的働きの場所、そして、單に物理的に働くものは、働きを唯一的に限定せられると云ふ事は出來ないのである。

では、その働きが、それ自身に於いて、唯一的に限定される場所とは如何なるものであるか、つまり、それ自身に於いて働きが眞に特殊的に限定せられるとは如何なることであるか、と云ふと、眞にそれ自身、その働きを唯一的に限定せられてゐる場所は、我々の具體的な行爲の自己のほかにないのである。

かくの如く、唯一的に限定せられた働きとは、行爲的自己がその存在そのものと共になう所のその時、その所に於いて、唯一なる行動の義務に他ならないのである。しかも、その範圍が唯一的に限定されるのは物理的作用に於ける如くに、單に他の作用によつて定められるのではなく、自己は背後より自己を蔽ふ場所に於いて、他に對することによつて

のみ、自己として唯一に限定せられることが出来る。かかる唯一の限定なくして、我々の個性的自己と云ふものはないのである。

かくして、ここに於いては、前には單なる働きであり、感覺であり、衝動であつたものは、今は、唯一の課題になう行爲となり、單なる働きの場所であり衝動的自己にとつて物理的作用の場所であつたものが、それに於いて、ある一々の物が個性的唯一なる限定を要求する當爲の世界となるのである。

従つて、我々は衝動的自己としては自然に對して立つが、行爲的自己としてはかくの如き社會的、即ち當爲の世界に對して立つことを知らねばならぬ。

かうゆうもとからは、「ありのまま」と云ふ現實に就いても見方が違つてくる。現實とは、現在に於いて成立つてゐるもので、過去も未來も現實とは云へない。それは、我々が現在に直接に面接してゐる事であるから、従つて、自然の現象のやうに過去から現在、現在から未來にわたり同じ法則に支配せられてゐるものではない。従つて、我々が現實といふとき、現實の持つ現在、どこにとつてもよいと云ふわけにはいかない。我々が動けないやうに限定されてゐる所でないければならぬ。然し、動けないやうに制約されてゐるその裏には、我々が希望と要求に従ひ、自由に未來を作つてゆくことが出来ることと云ふ豫想をもつものである。故に、現實とか現在とかは、未來の可能性を豫想しなければ成立たないものである。で、過去が我々を動かすのできないやうに取圍み抑へてゐても、それが個性的の歴史の現實と考へられる時は、なほ自由に働き得る、新たに作り得ると云ふ意味を同時に含むのである。これが歴史の自然と違ふ點である。つまり、自然は運動變化するだけであるに對し、歴史は生成するものが同時に自由な働きに屬する、生成は行爲を含みそ

れを媒介とする生成即行爲である所に成立つ、然し、個性的の歴史の現實は、得手勝手に作爲はできない。過去の必然性によつて決定されてゐることを通じてでない、可能性を自由に未來に實現することはできない。即ち、我々が行爲の俳句のホエシイに立つと云ふ時は、生成即行爲は發展即建設であり、未來の可能性が過去の必然性を通して働く、過去の必然性と未來の可能性の結びつきの「永遠の現在」である。我々は相反する二つの力が結びあひ、交互媒介する圖環に成立するとこの現實に立つのである。

かくして、この關係を不注意に過ごす時は、一方に於いて創作者、他方に於いて批判者に區分される發生的方法論的ホエシイに陥り、作品はつくられたものとして、その價值批判は常に兩者間の相對的價值に終るのである。個性的の歴史の現實にたつ批判的方法論的ホエシイにあつては以上の二元的なものでなく、つくる人——即ち詩人のみの存在となり、それは即價值行爲者であるから、批判行爲者は詩人であつて、價值の行爲者即價值の批判行爲者であるから一元的な立場である。

かくて、つくられたものとしてのホエシイに立つ時は、つくられたものとして直ちに批判をもつから、さうゆう方法論・價值論は、すでに創造された方法、或は價值に就いて、發生的方法論的な發見すみの價值行爲の祖述、或は分析の歴史に陥つてゐるものである。

定型俳句の大多數の俳人は、自然發生的のホエシイに立脚する限り相對的批判者であり、詩史に於ける方法と、價值に關する外部的な祖述者である。即ち、ならん方法ならびに價值の創造をしないものであると云へやう。

——終に參考書を列記し深く諸師に敬意を表するものである。田邊元氏著「歴史の現實」、春山行夫氏著「詩の研究」、外山卯三郎著「詩學概論」。

隨筆

松宮 寒骨

○ 小燕でも時かうとて、道路の一隅を起して居ると、大石小石がころころと出てくる、その中に石斧の破片が一つ出て来た、この成城のすぐ隣りが神代村である、神代村と云へばその深大寺の小學校に石器時代の發掘物が陳列してあつたのを餘程以前に見たことがある。してみると矢張りこの邊にも前住民が棲んで居て、何か作つて居たのだつたらう。

○ 大きなリュックサックを背負ふた男が、そのを庭先に現はれた。男はびよこんと一つお辭儀をして、新薩摩芋はいりませんかと云ふ、いらないと返事したら、そのまゝさつさと歸つて仕舞ふた。すぐに風呂敷を抱えた男が来た、甲州葡萄は如何と、また庭先に現はれた、これもいらないと云つてやつた、するとしばらくたつて朝鮮人の女が、梨はいりませんかと云ふて庭先に立つて居た。

今日はいろんな闇賣りがくる日だ。

○ どうも煙草がたりない、露の葉を乾して吸ふと煙草の代用になると云ふので、それをやつてみた、或人は露を乾しても結構吸へると云つて居た、それもやつてみた。

しかし露でも露でも、煙は出るには出るがたゞ煙だけの話だ。

○ 學生に逢ふと舉手の禮をする、それも學校の近傍なら何でもないが、

この間は銀座で四五人かたまつて居て、一齊に舉手をしたのには面喰つた、今日は新宿で三四人一團になつて向ふからやつて来た、中には飛行靴さへはいて居るものも二人あつた、さうしてみんな帽子を取つてお辭儀をした。

○ 薩摩芋はうまいが、あの葉は面白くない、従つて芋畑は殺風景なものだ、僕の家の芋畑には雁來紅が、ところどころに植ゑてある、もう葉が眞紅になつて、風にゆらゆらと動いて居る、一寸嬉しい風景だ。

○ 同じ顔の道具でも、鼻はこの匂を嗅ぐまいとすれば、呼吸をいきんでさへあれば嗅がないですむ、眼はこれを見まいとすれば閉ぢればそれでよい、耳はさうは行かない、聴くまいとしてゐても音響は勝手に入つてくる。

指針を記す(二)

中塚 一碧樓

まつすぐトマト畑に入りもの啄むめんどり 細谷 不句
われらの先覺、不句氏の一句であるが、ものを観る見方、ものを云ふ言ひ方、實に的確であり正鵠である。不句氏の作は常にさうした傾向を持つてゐるやうであるが、此句にしてもその雌鷄のかたちが如何にも正しく明かに表現されてゐる。

たゞに微細に見てゐるといふのみならず、謙虚であり澄瑩である心持

がはつきりと感じられるのである。この句は「まつすぐ」といふ感じから句を發してあるところ、一句に生氣を帯びてゐる所以であり、此實質な味はひ誠に學ぶべきであらう。

春日いま暮れる少年鐵くたな持ちて立てり 竜田眞魚

一讀清新な心持を誘ふ句である、少年の持つてゐるものが「鐵くた」であるからでもあらうが、「春日いま暮れる」といふ心のけずみもいふと思ふ。

僕は勝手に東京都の焦土の一角を思ひ描いたので、句の底にはほのかながら建設の光を感じたのであつたが、これはむろん僕の勝手な考へ方であつて、少年の立つてゐる場所が何處であらうとも、少年それが「鐵くた」を持つてゐる場合であり、「鐵くた」を持つてゐるといふ事で充分に一つの心持を表はし得ると思へる。「鐵くた」といふ言葉は之は通常使はれてゐるのであらうか、此場合「鐵管」では困る事はよく判つてゐるのであるが「鐵くた」といふ字面に何やら一寸妙な氣持がしたのであつた。

冬木の中をくる人あり夕日を透して見る 黒丸古生

親しみの情おのづから出てゐて、引きつけられるやうな句である。

此句では、冬木の中を來てゐるのは「人」であり、「友遠方より來る」といふ「友」といふのとは別に、此場合の「人」といふのは實に澄んだ心持が感じられるのである。「人」に對する人の親しみの情、それが此句とも云へるであらう。

「夕日を透して見る」は情を誘ひ過ぎて、僕には些か「云ひ過ぎ」の感があるのである。少なくとも「夕日」「夕」を割愛して、何とか推敲すべきであらうか。

浮氷ちりちりに海はひろい海 三國屋白省

春に向つてゐる漂渺たる大海原の壯觀が生きてゐるやうに表現されてゐる。浮氷について「ちりちりに」といふ言葉は少し弱いやうにも思はれるが、後半の「海はひろい海」といふ張リによつて補はれて、丁度の表現を得てゐるやうである。

「海はひろい海」といふ言葉には一寸癖を感じられるが、此場合は一つの強さを持つてゐていふと思はれる。躍動する海の大いさを感じるると共に海原の光りをも表はし得てゐる。

大雪の名残り一塊の雪をくたく家裏 井上星樹

地味な句であるが作者の落ちついた生活の日常がはつきりと判るやうである。思ふに、雪がだん／＼消え減つてゆくといふ軽いよるこびもあらうし、雪に籠る靜寂境を惜愛する心持もあらうが、さうした情を句の表に云ひ出す事なく、たゞに「一塊の雪をくたく」といふ事に據つてあらはし得てゐるところ鮮かな手法である。

水を一荷島のひと一人通る 近木黎々火

人の情合を感じる。殊に「一荷の水」であり「一人の人」である所から如何にも素純な思ひを引いて來るやうである。

島の人が運んでゐるものは、他ならず、それは水なのである。水は何でもないやうなものであると同時に人に最も大切なものであるのは云ふを俟たないであらう。又「水一荷」といふ事が、それが島の小景であり、島人の姿であつて、至つて自然な描出である。

此句には季節が表はされてゐないが、僕は最初その事に少しも氣付かなかつた。それほどにこの澄んでゐる情に引かれたのであつた。

線の光も河原一すぢの道春來る 奥田新次
此句も地味で好感が持てる。長い冬を纏て明るい春を迎へるといふ夜の明けゆるやうな氣持が素直に表現されてゐる。

「空の光も」と眞正直に言つた率も養成であり、更に「河原一すぢの道」といふ地味な思ひもいふと思ふ。徒らに風景の賑やかな句よりも、かうした簡素な實であるものに概ね好感が持てるやうである。

句評

朝倉九鷺子、巢山鳴雨

山田宗作

白浪たつ風が夾竹桃にけふ聯合軍上陸 (吉田六長)

【九鷺子】この頃の誰もが氣拔けして、只茫然としてゐたのでは無かつたか知ら。僕など仲々に詩情復歸が出来なかつた。さうした當時の句として可成の作と言つてもいいかも知れない。色彩感の多分に濃いのもよい。

「白浪たつ風が——夾竹桃に」とたくみにはこびこなしてゐる。

【鳴雨】まことに無駄のない表現である。言葉もこれだけ美しく意匠をこらされると針のさしやうがない。「けふ聯合軍上陸」といふ峻烈なまでに我々の肺腑を貫く現實の姿を、ズバリとむき出しにした緊張した語感、そこには無限の餘韻がある。この夾竹桃も實に巧に使はれてゐる。殊に作者が神戸の人であることを思ふと、尙ほ作者の魂をゆり動かしたであらう夾竹桃の鮮かな姿が、うつとりさせられる程身に迫つてくるものな

感ずる。七八月頃の神戸、京都等の夾竹桃に心をひかれてゐた私は、この夾竹桃に季節の感覺を強く感ずるのだ。「白浪たつ風その風が夾竹桃にも——いや夾竹桃に——である。私はこの場合、あれにも、これにもといふ多面的なものを感じたたくない。只夾竹桃に、といふ限定された境地をこそ素直な作者の氣品と感じたいものだ。あの厚みのある細長い葉に包まれた夾竹桃の赤い花、この花と混然一體となつた白浪、さうした中に、大きな敗戦といふきびしさを感じてゐる作者、けふ聯合軍上陸」といふ言葉は何の技巧もなく据えた手腕、しかも立派な階調をもつたこの語感の如何に感覺的なることよ。

【案作】一句をよみ下してみて、如何にもテニヲハの使ひ方の輕妙さを思つた。「風が夾竹桃にけふ聯合軍上陸」など寔にリズムミカルな輕快さを感じた。それにしても「白浪たつ」はすこし出來すぎの感じがする。

星、中學生が二階と二階の灯で話してゐる (平松星童)

【九鷺子】星、(句點)と冒頭した、そのことのこの一句に對する詩的効果は私にはピンと來ない。この句點表現には續くべき何物かの省略があるとして、中學生が——の「が」二階と二階の灯で——の「で」は餘りにも説明的なテニヲハである。

と言ふて私は句點表現を非難するものではない。全體としての表現が省略句點の表現と調和して完全する句構成へ一段の工夫を希求して止まないものである。

【鳴雨】若きの溢れた句である。清新な感覺が漲つてゐるところが生命である。こゝに若き星童の旺盛な苦悶がひそんでゐるのだ。敢て旺盛な苦悶といふ。若きいのちをしみしみとたたへて匂うてゐる句だ。終戦まで管轄下におかれた二階と二階が、灯をあらはにして話合ふなどといふ

ことは、こゝ數年來味はひ得なかつたことであるが、いま、終戦といふ大きな現實の前に照いとぼりははがされたのだ。この灯がいかにも明るく我々の心に蘇つてきたことか。灯を忘れた生活から解放されたいま、敗戦といふ事實は兎に角として、この大きな轉變の中に一とすぢの明るさを見出したのはひとり作者ばかりではあるまい。まことなつかしい灯ではある。勿論終戦といふ觀念を失くして考へても、この句の普遍性にはいさゝかの動搖もあるべき筈はない。二階と二階に流れてゐる若き情熱の炎の上に、さえずえと光つてゐる星、星、星……。この星こそ若き魂である。一見散文的に見える「中學生が二階と二階の灯で話してゐる」といふ言葉が、この「星」といふ語感にびつたり融けて、流動性のある句格を組立てゝある。この作者の持つ童心的な、抒情的な風格が、鮮明な大寫しとなつて描き出されてゐるのだ。ユニツクな作者の縦横な手練が羨ましい。

【象作】この句では「二階と二階の灯で話してゐる」といふ所の「二階の灯で」といふ表現が生命である。この「灯」には若人の生命が無雑作に平明にうごいてゐる。これが新俳句の「輕み」であると思ふ。俳諧の「輕み」がかうした方向に新しい息吹をもつて來たことは時代の一つの進みである。

雪に掘りし土ありて白き柩を埋む(老父逝く) (小林滿巨斗)

【九鷺子】一句の事實は哀悼の極みである、然しながら事實そのものが三者の心をかき打たうとも、表現がこれに附隨して詩感をかもし出すことによつて、詩としての價值は決定する。

句中「白き」と言ふ表現を私は採らない、もし作者がこの「白き」を表現に取入れなかつたとしたならば、何かが代つてくる筈である、或は全體

の句構成が異つて來たのではないかとおもふ。

【鳴雨】老父逝くといふ前置があるが、さうした限定された作者の感傷としてでなくとも、「白き柩を埋む」といふ言葉に潜む作者の感動は充分伺ひ得られる。殊に白い雪を掻きわけて掘り下げられた土の黒い色が雪の上に掘りひろげられてゐる傷ましい現實の酸しさが、作者の心底を通して句の上になじみ出てゐる。特に雪の穴に肉親を埋めんとするその白き柩に對する作者の強い哀傷の息吹が、切實なまでに躍動してゐるのだ。まこと「雪に掘りし土ありて」この土ありてに、如何に深い哀傷が籠つてゐることか。作者の氣持はいさゝかの停滯もなく凝視され、沈滞され、流動されてゐるのだ。かうした切實な感動の句は感動が強いまゝに表現が生硬になつたり、ひとりよがりになつたりして駄作に轉落する。この句よくそこを踏みこたへてゐる手堅い手法に敬意を表したい。

【象作】雪中に老父を送る切々たる情をよくうちに抑へて、悲壯感を徒らに表出してゐないところに、俳句作家としての床しさを感ずる。「雪に掘りし土ありて」はこの情に即した景で、新俳句の在り方を判きり示した表現である。

釋然灯をあかるくすなごりの團扇 (富岡敏)

【九鷺子】老練巧妙な一作であると言へやう。さて再讀三詠味はつてみて、うちむらしくは頭初にピンと來た感以上のものがない。更には新時代味が缺けてゐる。餘りに納りすぎてゐるといふのも物足らぬ感がある、未成品でもいい、新鮮さ、潑刺さのある作品を私は渴望する。

【鳴雨】「釋然」といふ言葉がまことに巧に用ひられ、快い音感を律なつてこの句を明るくしてゐる。「灯をあかるくす」といふ作者の意圖には、一面釋然たらざる感もされないではないが、然し「灯をあかるくす」下深

くよらばれる必要はない。殊に「なごりの團扇」と「素直に見せられる」と、断然この句のよさが鮮明になり、句作の鍛錬だなどしみると思ふ。相對する者の心境が靜かに明るい灯に融けて、そこに描き出された雰囲気——そしてその團扇の繪にも、快い親しさが感じられてほふましい。まことに、情景の幅と、リズムから生ずる構成の氣品である。

【宗作】「釋然」は全くこの場合の氣持にびつたりしてゐる。寧ろ即きすぎる位である。灯をあかるくしたところは如何にも日本人らしい「釋然」であつて、この一語にはたしかに意味深長なものが存する。「なごりの團扇」はすこし取合せの妙を得すぎであるのではないだらうか。

七十媼もつら魂雪國の雪の道 (稻垣一鳴)

【九鷺子】雪の越後の雪の頃、時局は緊迫の一途を辿つてゐた。見よ七十の媼の貌にも、からだつきにも、全心全身のな意想が感じられるといふ戦時統後の代表的な作であらう。

【宗作】「七十媼もつら魂」といふのは敬しい省略である。新俳句のかうした面も追々理解されてくることと思ふが、「つら魂」といふやうなぶつきらばうな表現など慣れぬと一寸面喰ふ。この句では「七十媼」と「つら魂」とはよく保たれてゐる。「雪國」に「コレ」とルビをふつたのもよく釋る。

ひがん花山へしんぶんのきてはがきがくる (森林五)

【九鷺子】この句靜かなる疎閑地の一風景詩と私は觀る。この場合街から引きこんだおのが住居を作者はヤマといふてゐるのではないのか、とすると「山へ」といふ表現で、自分の表現しやうとしてゐるものを果して表現し得てゐるであらうか。

「山の家」或は「疎閑地」に「ヤマ」ルビすることによつて成る程度まで表現が盡くされるではないか。私はこの様に大方のルビ附眼を提唱したい。

自由のないところ藝術はない。自由民主々義日本の發足期に際して、俳句としてありやうは、表現、内容、形式とも眞の自由が一切の基調であらねばならぬ。他の一切の藝術に伍して研々日新其の一作一作をして遜色無きまでに、明日の俳句をして高麗藝術の域まで押し進めねばならぬ。それが爲には俳句日本人は、眞深荆棘の途へと突入の意氣を先づ心持しなければならぬ。

【鳴雨】靜かな山間の生活を思はせる句である。然し現在の日本の姿から言へば、そんな安易な土地はないかも知れない。どんな山間僻地でも、この大きな現實とは取組んでゐる筈と思ふ。そこで世情の推移に對する作者の何かを求めんとする心が、いんいんと脈搏つてくるのだ。しかるに「山へしんぶんのきてはがきがくる」と、いかにも無雜作に淡々と置いてある。こゝがこの句の味であり、味はひどころであると思ふ。ひがん花の赤さもよく生きてゐる。絢爛たるその花の風情も、こゝでは寧ろひなびた素朴な味として受取られる。嘗て奥日光を歩いた時、青柳平といふ山間の地に一泊したことがあつた。全く山の中なので、新聞も三四日位おくれでくる。しかも郵便と一緒に配達されるのだ。さうした山の生活が穩かな句ぶりて表現されてゐる。

「しんぶんのきてはがきがくる」といふたみかけの手法も面白く、輕妙な言葉の中に溢れる作者の意圖するものが、靜かに胸に迫つてくる。この場合、はがきもくる——でなくて、はがきがくる、としたところも限定感がなくてさらつとした爽さを感じさせる。

【宗作】「しんぶんのきてはがきがくる」と俗語を平氣で使用して、然も

其氣分をこぼしてゐない。それは「山へしんぶん」がくるところに「一句の「輕み」が在るのではないかと思ふ。如何にも山住みの生活が躍如としてゐる。この場合の「輕み」といふのは新俳句の俳諧味をいふ上の「輕み」である。

選句錄

卍 禪子選

裏日本の裏街や沈丁花子の子呼ぶ 稻垣一鳴

飛ぶたんぼの二階疊ほけてて(愛猫死一年)

風のまにまにきりぎりす聴くステッキ日射しぬ
はやせおもへば山山雪消ゆるばかり

靜かなひと時雀の子助ある日とおもふ(新居)

生きてかへつてさみしいのちこほろぎの闇 すぎきゆきひと

秋草にそぼつ雨よ私はそこから食草さがすんだ
粟ひろふしんけんな眼ぞかなしけれ

寥に耐へひとつのりんご食べ了る

これは静物りんご灯して夜のしずかなるつどひ
看護婦には看護婦の仕事が、午後の枯木にある雲

すこし快ければ雀が濡れてとんでいく
それから雪になつたカーテンおろしくる夜の氷薬

宇野 彖 録

よいお天氣の花を咲かせる場合で鍼灸按摩いたします
歸つてきた兒の體が細くて寝かせてある寒夜

秋風立つ砂の上駈ける

稲は黄の旅のこゝでも

月夜の、牛の鼻の鉄輪つめたし、

冬のぼつぼつ仕事の母

風や丘の病院も灯つた冷たい月

さめざめ葉こみ雨を枳暮るる木下をわかず

勝つべき山の蕎麥花のうれしく今日九月十五日

この胸ややしつむいたずらに逞しく莚麻

水落ちる井出筋人々へ秋の日は照る

藪を絡む葛花藪影がのぶ間田に下る

繩玉、明星まむかひに吾が五十四の秋たけて繩ふ

朝空おろそかに出た遠足の隊に日和待つ

繩縋ひ藪のかぎりなひつくし朝を誓へる

廊下に出たが月でありすぎるだけにカンナが炎ゆる

おおまかな流域わづか二戸の家が建つてゐるにすぎない

合歡木の小枝がまたままでお地藏様の顔といふものは

酒醒めて夜更もどりの車と竹藪のゆれる音

夕陽池に射す鯉の様な木の葉が落ちる

池の端の菊は白く朝の洗面をする

豆畑つくる處丘の上秋日さす

こんな山峽家並に住む遠く鐘ひびき
山のかげにも家が有り秋の山に煙
粟の穂を切る膝がしら朝日のさしくるぬくみ
けふをくらすこゝろ粟みのり赤き葉をかされ

照井 稗入

關口 比呂志

園木 六食子

森谷 乙山

伊藤 柳江

林 さあな

乳樹根くくるに風鳴らしそこの地の枯葉
阿蘇ふるさと引きし粟の葉赤きなど

兵にふるさとあり栗柄垣の葉や雲の昔
直江津女ひとりの顔かなあの日あの山

蓑切も子もおしやべりな子たちふとちりち
終んぬ川赤しけふも何流す(休戦)

竹叢蟬すがしのラヂオ首相宮とこそ
芽木や子の聲嫉捨似ての田の景(春日山公園)

来る冬も来る冬もへんてつも前の田稻かり霜す
皆が夕食後のまだ明るい蟬をのぼらせておいた樹

蛾の來てあり終戦となりし室の物物灯に
むかし厘毛の帯一文鏡が光り明るく秋祭

とほの南の秋のをんならがたことと日本語
芋の葉の水玉うつくし亡き人どの水玉にも

て入てん手毬てまりが家根へ止つた後の雛日
あさ粥間引茶の淺漬每あさの淺い皿

二階住ひになれ今年今年月見
紫苑の花小さく咲いて四年の戦ひ終り

シロップ走り抜く野分の日本
師の額かけ直し冬籠るなり

雪が來るこの街には街の静けさがある
山羊のこゑかわることもなく夏から秋

道なゆく垂れ穂の影し穂にふれんとし
山に鳥の聲秋祭りの五目めしをくふ

菜花さき菫坊主立ちやや低く豆の花さき

稲垣 藪柑子

西垣 碧禪

南 畝三、坡

榑田 東谷

榑田 東谷

榑田 東谷

榑田 東谷

榑田 東谷

榑田 東谷

榑田 東谷

榑田 東谷

雲が出て風が出て番れてゆく白藤のはな
空針を積み重ねる庭の隅芙蓉の咲き

柿を食ふ柿の味不作の年雨つづく
歩くだけ歩き雨にぬれて雨の中草青い

終戦を鉢植秋海棠伸びて赤い莖赤い花
日さし山羊ゐて鳥なき柿落葉をふみて

退勤する路ここから山道とな穂すすき
新聞とじこんで了ふと寝るばかりの蟬

佛さまの飯たへ忘れてゐるのを喰べるとする
杉とかなめと風に倒し明るい厨あすの米磨いでおく

秋ひでり據埋める人々黙々としてばだか
きをひ朝風海は満たしてボツボとい航く

時計刻む音の朝月が出てくるこの島
秋ながせ散る花白き旬日のもくせいで

秋もの廊下に狭い時化の學校を戻り
沿線買出しのゐなくて時化の萩すすき

抜かるる桑の錆び葉に日が淡い
そのかみ戀に死にしてふ山のもみぢ葉

かくれおおせた氣の蝗の腹のひかひかせる
朝な降りぐせ芋の葉さうざう

たたずまひ岩々がそち湯谷へ紅葉
しんみり踊るとかまへそのまが君の紅なる唇

窓澄む風の此の夜もがしみぢみ掌のひだ
風、家あたりと目閉づるしみぢみくるし

鈴木梅子人

鈴木梅子人

佐藤 鳴風子

川口 三角洲

伊藤 水穂

伊藤 水穂

伊藤 水穂

伊藤 水穂

伊藤 水穂

早川 昇

早川 昇

早川 昇

遺稿

慾婆つて慾張つて落を闇をに皆霜け
井出合水

甘藷多收のコツを煙草一本二人で
泉 大咩

甘藷苗床は初の試み赤飯を蒸す
泉 大咩

落穂洗ふ流れ芽されし落穂をみな岸につみ
佐藤裕山人

落穂洗ふ流れ芽されし落穂をみな岸につみ
佐藤裕山人

岩魚止の形關所に似て瀧に紅葉
上條無庵

お前のもつ札束よりも一塊のむし芋うれし
森 林 五

死んで生れて死ぬ時の月と今宵
會田保男

橋も道路も何も彼も月もぼろけて
太田青穂

しらしら朝田巢山離れの鶯の鳴くに歩調
久野仙雨

祭り甘和の顔、晴れやかな顔こころに陽
松尾十樹

秋海棠の庭をな丸窓に座し茶の冷ゆるをも
松尾十樹

この友に學ぶことばかり酒つがれどうし
松尾十樹

夜更けくす粉あたたためまだ書く信りある
松尾十樹

汽車がとまるとこぼれるやうな人へ秋陽
松尾十樹

畫席人まげら疊の目をふく秋風
松尾十樹

稻穂出たところが見える暑さで人が通る
吉澤稻市

蚤かぶ家のさやみんどうがなり川が流れる
吉澤稻市

鼻の先をばつたが飛ぶ戦争のことを忘れませう
吉澤稻市

線路に露置いた切符を買ふて乗る人の人数
伊東蓬左樓

母となり母祈る茶の花しろし
伊東蓬左樓

秋の日深い山ののみやし
伊東蓬左樓

それぞれ職をもち爐火をかこむ父と子
伊東蓬左樓

鎌を納め炭焼く山の時雨るる
伊東蓬左樓

落穂洗ふ流れ芽されし落穂をみな岸につみ
佐藤裕山人

春に山盛りの大根ゆるる肩張りて男
佐藤裕山人

みちこ蒲原杖いれ收らず秋霖雨やみ
佐藤裕山人

峯に雲こころ山脈や秋の陽が霽れ
佐藤裕山人

無言わたしと山の土とまんじゆさげまつ赤に
森 林 五

まんじゆさげ住むに山の家またくマツチ箱のこと
森 林 五

葉のなく梅の木は立つひがん花咲き
會田保男

月光のゆらぎ堤端に落ちさうな月があかい
會田保男

月落ちし月見草の塊を舟に倦み
會田保男

あのこもあのこも草の實をつけて夕焼です
太田青穂

なつかしの唱歌集を聴く明るい灯に輝はれてきた
太田青穂

久々に赤城山晴れ稻穂がよい稔りを見せてる
太田青穂

蜻蛉とる吾子の足どりも新しい日本の姿だ
岡本権三郎

泉水のみづのしづかな秋はれ
岡本権三郎

秋はれの鸚鵡に言葉を教へある
下川きよ子

霧の後の朝日の中人々耕す
下川きよ子

夜長針の光りもわが衣縫ふ手が冷い
高内千代子

今夜はお月夜で蟲の音が夜を更けさせる
高内千代子

煙の叔父さん私は緑の日向て下駄をすげます
小林なほひ

秋 敗 戦 の 秋 蟲 の 音 し き り
小林なほひ

月夜の庭下駄をそろへてをく
 平凡に生れて朝々木魚をたたく無心
 會へばふたりの月が出てゐる
 柴戸から秋來る蟲の月夜茄子
 橋送る兵と笈し河の水流れ
 蚕上さつげり疎閑者手に花菖蒲
 計報手にず管制下の雷雨はげしくて
 土用たつ風の病葉の石段を降ろ
 トマト畑足踏む露叢蟲の鳴く
 銘木既になく玉垣のみぞ昔語りに
 運播きの蕎麥花の咲き初めし見廻る
 爐火に居眠る戸開けた儘の夜
 かつての日のこと儂きいま二百十日の雨
 二十二夜待ちまちあぐねあやし雲を月白る
 來るもせに風わくら葉さそふ夕暮る冷え
 醒めて幻影を追ふ杖なくて泥土
 蟲聲膝もとくずしゐる机夜の學ぶに
 家めち見ゆる柿食べたいと小供ら
 雨の朝に秋蚊のたたかかれて膳を這ふのも
 風かまがふ漏る夜の騒ぎながら雨の寢床寄する
 軒なみ列らぶ旗々の今朝の嬉しく
 落葉のつもりし山の山の茸狩るを
 敗戦ちふや林檎探りのこせる秋陽に眞紅
 山茶花は舊本讀みての俳句處女作
 朝早い演習にいつたことも夕方鯉釣る

加賀谷灰人
鎌倉白羊城

加賀谷 宏

中山百姓

池上耕山

池上可考

中山亘子

伊藤岳宗

保科滿藻流

池上あつ志

原 啓之介

松金董順

中村倉次

西垣影地

をなざと云はれてゐて早起樂し秋を若者(踰邊)

大原啓生

秋のくれぬギーと窓鳴る家や家
道のくるるかつかつと下駄の歩調やおかし

兄の子目々重くなんぬ秋となる朝

今は來て日歸りながらの梅の香谷瀬を

つきこむる鐘の松山を秋日は照らひ

月夜の低き山一つ灯の落ちし村に入る
十六夜待つにはあらね野を來ての尾花(故郷にて)

月もなくゐていつや時雨くるまで寢姿で
齒が痛くて秋の月は雨になる
塩風が桃の葉を枯れさせる背にれる
山々黄ばみて秋になつたと密柑賣りが

草部松月

鶏頭もゆと下草の枯れも旅に誘ふ

この村は櫛の木の多い村の名は知らない
垣越えて太鼓の打つ音蟲の寒さ加はり

月待てど薄穂のまばら雨にはならね家に入り
テープを見なれたこの町の秋空となる

敗戦の今日を想はざりし豌豆を蒔くに菜園
今年是不作の柿とりて佛壇へ二ツ今朝は晴れり

五十嵐 周之助

北川寒雀

横山空華

一 碧 樓 選

雀はとんで秋祭はをへて少年
人に著るものがありさうして十月の人民

山崎多加主

秋白く日にほす人がからだうごかし
 秋の日人間何百人貨車に乗り僕おとなしい方
 ことも嘘を探り大人嘘を探りつきく去りし
 兄弟相違ふ 稲田みち 稲の花咲く
 お寺大きい 屋根朝霧かゝる 街中
 磧の石の 秋草と雨にぬれてゐる 朝
 秋少し咲いて 窯に火を入れる 山に山の冷えあり
 子供ら日をよくる こぶ平等院 秋道
 向つ海廣いに感謝す 蝶干した家の 萩
 兔が 諸蔓を喰ふよく噛んで 喰ふ 諸蔓
 田の水に伏す 稻を刈り 彌彦山遠いとこるに
 この 朝銀杏を拾ふ 嗜れる 空雲のうごき
 黍の穂は刈つてしまつた 疾風吹くこのみち
 柿が重々しく生り 朝早く人に訪はれた 亭主
 我住む 部落 屋根 根重り 合ふに 秋の日
 木の枯れた中に 煉瓦工場ありて 道を來た
 庭に 杉の葉 落ちた まれるを 掃がぬふぜい
 竹むら 日さし その 下の 木の 落葉
 稲掛けた家に 沿ひ川に 沿ひして 家を訪れる
 木犀から はなれ 木犀匂は なくなつた 人に出逢ふ
 馬にかいばた べさせて 働く 寒くつて 働く
 ご飯炊きする 煙が 座敷に こもり そこへ 芋貰ふ
 少女とかける くぶらんこに のり足に 秋草のふれ
 母が 白菜の種を まき その 足あと 夕べ まで あり
 方々 簡易住宅 藪の花 咲れると 見れば 墓地にて

北川 吸江

川島 南海城

中村 亂水

木谷 貞次

吉澤 稻市

星野 武夫

訣別工場を出づ 秋草一方へ なびき
 この 朝海老汁を 吸ひ 母既に 着ぶくれ
 親なり 母なり 一應こゝに 焚木集めたる 秋
 田圃の 向ふの 湯を 総田に 暮らし
 ぐるり 秋の木立こゝにも ありて 草原
 山みち 露みち 牛へもの 言ふ
 歩きながら 話しながら 地梨の 實一つを 手にし
 墓は 山腹に あり 萱の 穂に ぶれる
 うるしの 葉少し 色あつて 下る 山の 白砂
 火鉢に 火ほしく なり それと 子に 服ほしく
 堤があつて 枯萱の 山は 枯萱ばかり
 きのこまだと れずに さうたう 山ふかく
 戦後きの つけふを こゝに 堪へてゐる 薄暮
 生きてすこし から いなまの 若荷を たべる
 消し炭を ほす 百日草しつかり 咲いた
 秋出水 つめたいくる みいくつ かひる ひ
 くるみの 實落つる ひくい 板屋根にて 住めり
 萩むら 花咲けば こゝに 母子に 水音ひびき
 ばらばら 雨が ふりくるに 野菊の花に 子供達遊ぶ
 額汗ば みし 少女に 陸稻の 青い穂立ち
 吹き抜ける 風ありて 家に 茶の花を よろこぶわが子
 我れに 一つ 背負籠が 出来た 十月がくる
 雨ふり 柿の 實うれる 窓に こんろを 据ふる
 穂の 出ぬ 茅に うづもり 茅を 刈る 男
 は たけな かへり 茄子汁に 坐りて 我ら

渡部 冬三

山田 不雪郎

石田 鳴子

藤森 澤瀉

加々美 絹子

沼 文生

地の一方へ日沈む椽の實ひとつをひるひ
漁師と沙をあるく雲白きもと秋の日
山が根巖あり葉赤き粟を引きかさね
茶の花ありおのれ白足袋をつけた
さらにうたがふこともなし紫苑こゝにさく
蕎麥の花が明るく明るい山のふもとの
住むところなき人に咲く草もなく秋草
小さな菜の葉汁女兒ちいさな聲し言ふ
山一つを控へこれから寒くなるだらう農談
短目近くの山から雲から暮れる
繪を眺めてゐる屋根に雨滴の亂るゝ音秋夜
いち日いち夜雨わが冬帽を見る
石路大葉をもてりをばさんずか刃か来る
西空から唄れて大根菜間引いてゐる人
ばへ垣刈込む眞上に來る 秋雲
子供毬つくことに鶏頭も紫苑も咲きし
馬は顔が大きく溝いちめん蓼の花咲き
秋朝峠を越す山一方の雲かげ
蓼の花やら草々水につかり花さき
菱びつしり生ひ子ども三人池に來てゐる
朝の着物をさせる子供達日焼けのからだ
山に巢のあり巢に蜂のかたまり露に動かず
蜻蛉道の水溜りにも死んでをり夜明けくる
今宵や冷ゆるを灯を見つめ灯いよゝ明るく
橋を渡り夏朝野菜賣りに來し人々

林 さあを

今井四露史

伊藤彌太

松本西平

赤松榮二

渡邊碧山樓

大倉親英

お寺の百日紅に陽がさした來ることにして去る
疎開學童ら還る日の近しむぎわら帽子持ち
稲田へ日の照りし見送られて歸る
月夜の月が出るまで稻架ける
こゝ甘藷植ゑたまゝ谷風が秋
月夜が雨の新文化運動の會へ行く
おそまきの蕎麥の芽を見て子等の叫び詠々
燒跡の道ほてり月代あかり踏む
湯につかる寮生の肌黒い聲したしめり
水車鈍い音立てにぶく廻り露草
紫苑雨に搖れやまず友達
畑のもの抱へ來る雲追ふて來る
鶉鳴かず飛ぶ二階から見る南瓜の群ら花
床から足が壁につかへ秋の色草
湖から風を入れて置所あり火鉢
七除八除下草刈の山へ續く曇天
山畑を耕す日中青木背にさし
陽かげに入れば汗びかりする男の後につき
蓼標があり百舌鳥高々と鳴く
稻刈り初む蟬とんであるくさむら
風となる朝焼け菜園にわが足あと
いちにち稗ゆきら田にゐることく
この朝盆のうみへ稼ぐにいでし舟うごく
われら山の水のみはつきり空をとぶ小鳥
稻架かぜたのしかぜつもの稻架たほれさう

須貝 秀

藤田三六亭

渡部 湖雨

口田 朴也

半田 雨衣

泉 大 畊

佐藤 禾 黄

松原 颯 々

家のべ稻を積み鶏ら胸はりて朝
 その鱈けふは焼いて時化つゞく秋
 こゝら舟で稻を運ぶ僕に垣道
 どんぐりを手にしこれの丸きをいふ或夜の親子
 圃土とさうして生きる甘藷の蔓を洗ふ
 朝に来て柿の落ちしあたり僕ひとり
 魚釣れず戻るまこと越後平野の廣し
 僕寒い肩して行くに掘られて芋畑
 落粟冷えてあり雲からくる小鳥
 青年ぞろくくくる高く冷える月
 机の埃白し實うれる垣の朝顔
 平常心是こゝろ家人に籠の鳥啼く
 獨りもの言ふては歸る大愚居士とその杖と
 遂に終職まゆみの鉢木枯れずに
 里芋葉の掣光り歟あとあらし畑
 明るき雲のうごき小苗密植の田の面
 明るき雲を呼ぶらしい山薯の蔓のひ
 萩しる花塵にこぼれ無口にてある
 曼珠沙華苔みたくまし空舞れてくる
 紫苑伐つてその顔あかるさ少女
 老母と畑に來てしつかり大根を蒔かう
 山の赤土をとるその一むら萩の花咲き
 稻の花がついて川の流るゝともなきを見る
 老僧うすものゝ衣着て鶏頭の花赤し
 母と來てこゝに草を抜いてなど空の雲低し

木暮羽六

大川しげる

三雲城東

近藤紫村

佐藤豁山人

牧野秋風嶺

山本光王

豊田芳生

紅蜀葵花咲く庭の樹々もりあがり
 山容したしく在れば秋夕の雲
 無言にてうすい霜踏んでゆく
 句瓏とあり稻の一穗に念ず
 蓼咲いてある川に馬に水を吞ませ
 人呼ぶに其道を行く穂草からみ
 風吹き胡麻の實筒が立つ一枚の畑
 秋晴れの鳶輪を描く吾が體を感じ
 秋空へ太い煙突あり碧い海があり
 終戦の話など農婦に紫蘇の實があり
 塩田低うて堤の夏の草々
 少女は眞面目な顔して家前朝顔の花
 秋夕海の潮うごかざる男諸を掘り
 伏す稻が稲田のいたみ祭を過ぎて
 雨ふり松の葉しげれる庭につはぶき咲きはじめ
 塀なき庭にて老樹木犀花しるく
 斯うした秋夜はつきりと話して了ふ
 豆名月から幾夜すぎて月を今夜みる
 朝霧のあるかまはず牛乳をとつて來て
 山に霧こめて山裾からの秋草
 松山杉山に入る日山國日々に短日
 浅春の山々を見る山が日向につゞき
 黒々として大蟬を二つまで見つけた子供達
 やんまの朋書く晝寢こまの花日ざかり
 はべの新芽を二つむしり二つむしり眞夏をすこす

鳥林庄作

宮坂借風

谷口矩良

豊田青坡

菅木葉

塩野谷西呂

平井青三

新田菓州

米軍進駐日々風通す黍畑
 無花果高くにうれて雨の日となり
 ずつと稻田穂の匂ひ一段高い道
 椿の葉と花と一本の木に五月の陽
 男が脛にゲートル巻いてをだまきの花種になる
 唐黍のしげり白い路遠くて迂り
 庭に赤い唐辛子一本ある我家に歸る
 藍染の皿を置き二人にて話すこの部屋秋の日
 友たちと蕪をつり友たちよく釣る小さい蕪
 ぢやがいに吹きふき茶碗にとりて家族ら
 和漢名詩鈔一冊と小机の枯れ葉と
 宣言と聲の秋鳩麥の實り
 庭木の根こぶしくしたあたりまで冬菜を蒔く
 田鯉黒しそして葡萄の移植を話す
 茨を伐り茨を焼く短日
 朝は山と山のかさなりをあかのまゝ映く
 何やら赤い實なつてゐる風にさからつてあるく
 殘響きび烟を通して見える四國の山
 茸引いて来てそれから鶏小屋へ這入る男
 兎に餌をやるのかつこうが啼いた朝
 遅しい男とゆきちがふふんどう花さくところ
 渡し舟岸を離れるに深い秋空
 山茄子を持つた人とすれ合ふ山道細い
 庭師の去んだ庭雨降りながら木犀匂ふまゝ
 秋の日子らよ太る柿は地に落ち

黒瀬潮鳴
 田部直枝
 伊東秋羅
 下平天耳
 中村常男
 中村とし子
 横溝竹水
 長谷川十夜
 二宮秋歌樓
 中野健三

芋の葉満んでゐ娘はつきりもの言ふ
 葱の種をまく苗床はつきりつくる地の一角
 砂防垣月見草海鳴の音聴いてゐる
 事務机一劃が少女らの野菊の花瓶
 めれて無花果の葉落ちる机により
 秋の日礫を廻つて来て疲れて裏戸をくゞり
 林檎はやし林檎の實雨に濡れてる
 子供の掌にいつばいの藁陽がおちる
 梅の木落葉する月の光である
 いつばい日を浴び櫃の實をむけり
 父の墓へまゐるみち秋の水すみて
 もの言へぬ寂しき香がさびしき栗の皮をむく
 柿の實夕映えてゐる高野を下る
 もうみんな紅葉して復員二人三人
 石青くつはぶき青く庭の一方
 牛は大きい口で草を喰ふ秋空
 塀の向ふ木犀の匂ふ秋晴れ
 あかれさす黒雲の間筑波見えてくる風
 ぶどう採りをばりたる畑け空より陽さし日々
 戦ひをばりて男さうして殘響
 くるみ落つ庭の畑秋葉が育つ
 常陸寺原きのこ飯食ふに風吹く
 石を愛づる父なれば鹽邊に
 闇の秋夜を河水の重みを感じて男
 家々夕もやの中にともる道の別れ

吉田五安
 大淵青榮
 塩崎移月
 笛木正松
 高橋安榮
 上田黙平
 保田重藏
 仙田黄蒿
 伊東歸去來
 二壺舎生
 新村滿壽雄
 丸山白水
 佐藤かめ雄

朝の人へ菊が美しすぎる青い卓
 塩風しばし秋茄子大きく残り
 山ことごとくうす曇り野菊花咲き
 お盆青い桃を供へてこの家
 水に泥足を洗ふそこに曼珠沙華
 麥の少し芽を出してゐるを歸つて來た私等
 窓のすぐ下は池であひる動かない夏朝
 月いよゝ明るくて療養所の白い壁など
 許された二人となつて秋は咲く花咲く
 晴れて山頂にてきこゆ清水のおと
 稻刈り終へし山を背に歸る男
 颯風あとの大きな川大きな流れ
 鶴鶴が低く鳴くしめつた朝の畑土
 常陸野のかたち山のかたち秋晴れ
 二階から刈田刈らぬ田筑波は遠し
 濡れ羽鶏雛雛も濡れて秋嵐
 嵐の颯へ行つて見る寝てゐる馬眼をひらく
 剝る屋根に葡萄へ顔打つ雨
 庭に干すさつまが匂ひする秋晴れ
 麥畑にする土と吾れと一日晴れて
 四筋の雲曳いてゆきしが和やかに秋晴れて
 木犀一枝を持ち鉄借りに人の來し
 子規祭近づくや土堤のまんじゆじやげ
 藤棚藤の幹も濡れて池の端
 蓮の花ひらく音が心の何處かを打つ音となる

瀧浪龍雄
 山本碩城
 上木彙葉
 笠原てい子
 梅澤 苔水
 石塚藍叢子
 大戸黒波
 齋藤吐石
 鈴木泡子
 新井妙椿
 岡本青梧
 碓 春雪
 伊澤地去子
 藤貫準治
 松本 薫
 歌吹海裡
 渡部東迷路
 倉本勤世

河原風に多摩のすゞき穗暮れ残る
 防空壕埋めつゝ見上ぐるに美し秋雲
 芦とこるとこる刈られ驚のゐる朝霧
 秋の山に見えてゐる城壁白
 山路を行くに池に睡蓮の花白
 百舌鳥鳴いて俳誌の表紙無彩です
 飲ぐ煙して家の入口庭のさゝくわの花

○ 井 泉 水 選

ふじが朝日を受けてるぶどう棚のぶどうがとうめい
 さるすべりの赤い病院から出てをんなの指のほうたい
 秋がライシャツの白い背に替いで山に湧く雲
 林のひまから海がすこし、秋が白い療養所で
 おやしるおちばどきのかざぐるまうり
 昏れる山があるいちばでゆく空
 きのこ買うてかへるきのこ籠の中にしてしたし
 空が、水に美しい雲浮かべてからの川原の秋です
 はればれと朝が来ては水に影する秋
 鳴いて飛んで冬の來たことを雀鳴く
 水車をもつて一軒はなれてゐる青田のとなほ
 女どもが折り折りくる峠の女郎花などである
 ほんの昨日おととひからの月が家の横すつかり植わつてゐる
 星から下りてくる風がすずしくて夜の白いほ物
 大川流れ朝の夕立あがつてゐる

酒井 蛸壺
 高橋貞三郎
 永井虹舟
 扇田 搖草
 仁科孝子
 高島しげる
 鈴木秋月樓
 瀧山重三
 櫻田悠子

池原しげる

秋は越後米山に雲のしづかなる漆の握り飯 東松篠人

荒海をまへに牛がなく芒の穂

戻り道は波音の松葉かく道

稻の匂ひも稻架の影が月夜になる此の道

雁木に諸の蔓ほして西日にいまころのてふてふ(高田にて)

いへに、月が月夜となりてゆく橋のかげおく

巖、鳥がぬれてゐる

山にうぐひすが、籠にうぐひすが朝日さしてゐる

情報、ちよいとメモをわたして冬木のひる

木が月夜になる木がぬれていつほんいつほん

月は樹の奥にある音して鯉のはれるも

月の出、流れの石明日の鎌をとぐ

しをり戸からはいつてくるてふてとくさばのびてゐる

降りやめばすぐ青い空のつがひのとんぼ

をんな自轉車のうしろにどこまでも稻の黄のみのり

山々がばやく日ぐれはする流にしてゐる

若荷の匂ひのあなささびしさまづしさ、をあぢはふ

じゆんさいのいるのちやわんのはるのつめたさしたしさ

こぼつた池とでんしんばしらと鴉はあるく

ふいてゐるのでなみだがでてくる

日照りの芋の葉を雨の來て打つて

鬼灯二つ三つ赤くてお盆が來てゐる

風がすずしくて幼き蟲の觸

負けたことは識つてゐる裸の子がとんぼを釣る

日が雲に入つてからも明るい稻の垂り穂である風

栃本よし雄

上野忠三

平松星童

名雪理輝

渡しこすと蓮が質になつてゐる秋の風が笹の葉

水くんでから蚊張は干して井戸端の木の桶

朝露、客を待つといとま種まいておく

掘つてみると案内よく出来たうちの藩、門のうちの藩畑

瀬の音を船頭さんどちらむいても雲がない秋の日

月が稻の根水にもつれてゐるのもおぼん

一軒ともると夜になる青田夏になる

わらがそつくり火になつて秋あめくらくしてゐる

すすきにかぜがすだれにもくる

あけない中にふつたあめのあまだれか

籠に間引菜を進駐軍のくるうはさを

かやつり草があるとげんのしようこのはな、坐る

此頃遅い月、月の出頃稻の匂ふてくる

みのつてゆれてあわの穂ふさふさ

あらしのおとの水音は月がくもの中

山で、掘つてもほつても山のいもの深さが秋

草の實がはちける線路工夫の頃

冬菜は鍋に煮えたつまでの青さ蓋をする

朝霧はれてくる木と木の間ゆく舟の火を焚いてゆく

石に月がくらくなる

草たげをどき腕の馬こんや名月

ひとりはいまだ戦地である目を晴れて野菊咲き亂れ

けはしき雲の山にかかりくるを炭焼く煙

雲から日のさし麥の芽青々と列をつくり

秋は天心に月澄み鹿の馬の草喰む音す

里井正子

皆川蓼二

植田市籠

増村辰郎

星がきら星蟲の音の中の音を聞き分けようとする
 なかなか乳が離せない唐辛子赤い實になる
 土が美しい月夜の麥を蒔くばかりにして
 雨にかもめの港の朝がもう寒い浮標
 山や川や還つて来て秋のうちの牛の顔も
 蝶々とちいさなこしのおそい豆に手をしてゐる
 芽が葉になる雨のずいずい木をひいてゐるひる
 木の星が夜明け水車を廻す水音のする
 鶏の糞も無駄にはせずに干して梅雨の日の照り
 めれたけさみもつた蟹ででんきがともる
 波音もない夜の月の明るさの蛙鳴くもつ
 蔓二階の窓まで這つて来てゐる富士の初雪
 木犀どこかで匂つてゐる一軒灯してゐる
 お互に焼けなかつたことがせめてものつくつくほうし
 雀木にあると葉がふる障子のきりばり
 それば紫苑のしづくにて朝雨はれてゐる
 草津道といふも昔の道しるべ石葉が散る
 雨だれの音にも耳遠いお祭の日のおげあさん
 糸まくへ手を貸し百日草の色あせてゐる
 うさぎ眞白く飼ひて夕べ與ふる草が實をもつ
 祭の群衆の裏は墓場拔道をして通る
 蕎麥の蒼が開かるとして遠い水音
 鳥屋によく日のさし一羽一羽が赤い鶯冠で
 負けて悔しいことはかり稻を刈るのに降りばかり
 勝算も公算も御破算の蟲がないてゐる

村田白鶴

菅崎道雄

平岡國次郎

佐藤龍

森田十雨

隣の畠には赤い唐辛子がある雨が降る
 雨がಾಗると蕎麥の種蒔いて山の雲白い
 平凡に生きることが若荷の花は白くてある
 枯れてあしが、雪が降つてやんでゐる
 白い壁も木の蜜柑も、夕日になつてゐる
 雲がしづかにうつる池の落葉風にちる葉も
 おつかれさんとすれ違つて月夜の棉の花
 裏は床屋の畑鍛冶屋の畑月夜隣り同窓
 島へ渡る切符手にして薬屋さんと秋
 向うの山に日があたりこちらの山に日があたりお彼岸中日
 夕べすずしく燕、橋へ帆柱倒さうとする
 牛が鳴いて通り風仙花がはせる踏切の爺さん
 稻の花散り浮いて流れてゆく水が戦後
 斯くて今年に、こしも濛濛にする
 向ふに船の汽笛が呻をまれば外海である雲
 星を、白い壁にもたれてまつ
 何かほしわらのにほひするらんぶ
 てふてふが乗合馬車のカアテンと風
 まんじゆさげおびたしきこのあたり人の通らぬ
 あらしのあとひとりふたりがかせのほうへゆく
 また人が餘る世とならうを秋の蟬なく
 旅繪師が描いた屏風のそんな昔が古びての秋
 障子の切り張りのところ白くて月夜お祭近い
 眞綿白く乾き此の村の秋のおまつり
 とんぼとぶ雲を敵とした國の銀翼であることも

武田桂

植田誠一郎

村田藤庵

平松未止

佐藤辰雄

一日雲のうへにある日が白い土藏と枯木 松村 禎久

ゆきにかぶつてきた雪轡子から目を出して少年

暮ればやい日さしが枯木、池にはさざなみ

すこし熱のある體よこにしてある合歡の花の雨

毎日播くものがあつてうぐひす今日も山の畑にきてゐる

玄關から梅のさかりも見通す馴染の宿の靴をぬぐ 上野 焦砂

子ども温泉宿の大きな下駄はいて夏みかんおもと木に

働きに行く群集となつてホームのぐんぐん同じ群集の急行が通る

あすはどうかやら晴れさうな星の家に近い坂道となる

こころ寺町の圓廣寺春覺寺とみな焼けてて明るく葉の散る 津田 笹彦

ゆきのきれいなあさの一本の水平線である

さくらちらすほどの風があつて風呂屋のけむり

春になる雨が灯のとどく松をぬらしてゐるしづかさ

月へふと蟬の鳴き出すなど涼しくしてゐる

川にそつて琴秋川にそつてバスが驟へゆくに乘つてゐる 櫻田 輝郎

いつま で み て る て も 蟻

齧きたいことのペンを持ちそれからの蟲啼いてゐる

空、この下で生れたたいつぼんの秋草を手にして歩く 平松 美之

孤獨になへて燃え盛る火にある

草に咲いてゐる枝に鳴いてゐる一軒一軒少女郵便配達

どつかりしりすゑた土瓶でながいよるがまだ背のくち

背中の子が泣くと子守もなつかきの木のかき 山一つむかうの海がきこえるこのさと正月一ト月遅れ 月があめのさあつとふらすので明け方までもうすこし 霧の中はつきり柿の實の赤いこともと少年馬にのつて通る

はまくはんざうに掛い道が造船所へひとすぢ 皆川 益

借りて農の一畝開引いて菜の青し一握り

テニスコート馬鈴薯のはな先生お達者でけつこうです

かりのやどりのかなかななげばゆうべとなる

とほしい陽にほして供出の豆供出の芋

かなかなびつたりしめきつた藏の扉、夕べ

月が日のくれるとあかるくなり馬鈴薯の花

竹藪の筈まで月、夜となつて今晚

睡いて生えて成つたきうり夕べすずしくて刻む音かな

月のあきらかにつばきの木の實 柄本 雄良

川が帯のやうな秋でおまつりへ橋をわたつてゆく

枝に熟した秋がうつつて水に、染物屋が暮染らしく

雨があがると楓もみちに日さし岩に堰く水のしるし

光もつとまあるい月の壁が木の中心

木から滴るおとの月が山をはなれてゆく

兵隊さんは復員、學校に學童みんな歸つた秋の日

蘆の暗さは舟を漕ぎ入れてより月が水に

彼岸花さく樺の大樹のもと朝日さしわたり

嵐の去んだ空海おと晚い月が出る

雪に日を決れてからの圓い月がある

棕櫚の葉、屋根から晚い月夜になる

西日がほつとさすときの菊の一鉢を置き、しんたい 瀧山 茂 雜

あられこぼす雲がひとしきり月のおもて、を行く 冬がこんなにしづかな八ツ手の花の下にある猫 月の夜製粉工場の細いえんとつ雪やんでゐる

名雪 正照

瀧山 茂 雜

暗い土間から貰うて出た秋の水車まわつてゐる
 膝に陽をあたたかし唐がらしの赤
 茶の花、茶の干してあるこゝもおまつり
 畑のもの川で洗うて朝の白い砂の秋
 川の向ふにも木や屋根や村があつて日がさして秋
 つゆけく夏藤の花の Copp にかしたの
 元の職場に戻り秋咲く花が焼跡にも
 丸い月が汽車の窓あをいみかんと食べる
 月夜木犀匂ふ道の村立診療所前
 海に舞ふ鷗の、秋の日になつてゐる
 藤の房藤の香の下のわたしたちかな
 ながいづちのちの藤のたりふさ
 よいおしめりの胡瓜の葉しづくする
 蟲なく大雨のみづおとのそのなか
 寺は眺めもよろしさに坐りしるいうちは
 夏がほつぽつ降りだした松の蕊
 何もかも芽ぶくばかりにして君、空へとんで征くので
 月光するどく壁に貼つてある抗日文字などの冬
 池の空は木があつて葉が散つてゐる道
 馬も嘶くに黍の穂ようのひてゐる月夜別命待機
 小川はせせらぎつ海の方へしづかに枯れきつてゐる
 壘の上まで麥埃にして英霊となつて歸つてをらるる
 行くに蝶々書いてもらつた地圖の中の麥畑なので
 ひぐらしの夕の夫婦きりの箸箱の箸

三好米子

内久根聖巳

佐藤專子

佐藤逸仙子

三浦清一

濤かぶる磐の巖や褶や梅雨霽れたり
 あらしにぬれたいちじく二つ三つが板敷
 橋脚だけのこつた夕焼を渡してゐる
 ほんに深い井戸つるべつりあげた月夜
 空の、海の青い地圖擴げて教へてゐる
 なま木裂けてあらしが月夜になる木の中
 藪へ月が出てきた厠のぞうり
 お婆さん太いたどり持つてもう驛がちかい
 月に戻つてよい月の大戸をしめる
 鴉鴉子らにはやさされて風が吹く
 高い煙突低い煙突海雨ふりつめてゐる
 家々管制の星が美しい家々うちへ戻り
 牛がほつつりほつつり暑い或日の兵隊
 會へば足りてゐる膝の柿かきのたれ
 秋の日淋しい町の床屋を出て戦はずんでゐる空
 戦ひ終へて賞になる南瓜の大きな秋
 朝々ほうづき赤くなる露を掃く
 菜ばかりが青々と焼あとの木々をわらす雨
 どうがらし青きを焼けば秋はれしひるとき
 田植すむと白い馬はうまや
 手づくりの豆腐水にひたしお日待が来る
 雨がふると榎の香り榎の實が落ちる
 焼けた木へ洗濯物干してゐる朝月

日向野秀策

南川鴻亮

山鹿廣市

夏堀望子

山田梅軒

そるばん御破算と云つたようなビールの涼しい
小島 胡市

やつぱり海狭は渡船秋空に風がある
ふればふくふけばふりやんであるこぼるき

つちくれ、おいもうまれてゐる
山に雲の移りゆく雨のそばの花、道

蓮の葉枯れると少し手すきになり雨
焼けた都會に汽車はいる皆降りる支度する

くつわ蟲速のくとくつわ蟲ないてゐて山崎へかかる
青 應 香

宿直明の雀ないてゐてはふは雨ふる焼跡の芋の葉
又三人したしく逢うてゐる木犀咲く頃は好い色の空

月にくも君と僕とで漕ぐ
島山 實 治

西があかるくて芋の葉の雨
子供オルガン雨は青い葉の雨

雲原ひろものがあつてくろくろ小さくなつてゆく苦力か
今年も一時間きりの控時間に讀む日本科學史五五頁

淡漂機にかけた鳥の巢も揚子江の小波早春(中支)
松本 十返花

一機二機と飛んでゐるのも我が機ではない秋の雲
障子にちよつと針さしておく冬日が冬木のかげ

秋の灯は箆笥の金具
横 關 碧 樓

前で鳴く蟲うしろで鳴く蟲の月の出を待つ
窓からの柿の實いつも、雨降れば曇する

霧が去れば野苺のつぶらな高原
村 上 二 丘

坂の上も秋日の燒跡がまぶしいほどの木が芽をふく
都々城 二丁子

朝は日の出て畑うちおこしうちおこし夕べ日の入る
北田 茶 木 彦

いも畑いもほりとんぼとんでゐる
菜畑田が短かくなつた青くくれてゆく

うし車からからとほるひがん花咲いてゐる
蟻が蟻をたすけてゆくこころでめしにする

石が沼のしづけさにしてゐる
一日一度通る乗合馬車で麥畑の麥の芽

雨があかるくて白い蝶がきてゐる
鶯、朝の茶は佛さまにあげてからいたたく

春の山がねれてからの灯をともししてゐる
花に風つんつるてんの着物に復員してゐる

あめふる音の流るる管の小さい子ども通學
山は夕日の紅葉の宿がある川はかけ

枯木に富士の、橋のたもとの駐屯兵である
浪 音、橋をかさしさて、ゆく

秋が澄みきつて朝の音楽の草の露
療舎いつげいの日さしもすなくころの静臥の時間

建設の聲が毎晩よい月夜である其をきく
あらしあとのうれしいね

朝はサンダルで田かける黄菊はつぼみ
ふるだけふつてわちやゆうやけ

影が芋の葉の満月
水にひるづきの秋ふかくなる

堀 切 春 扇

中 西 國 友

齋 藤 常 義

内 藤 英 夫

空が流れてゐるのでうつつてゐるあき
あきはあさぎりのちよいと寒いべんとうもつてでる
なにもかもまがつたことばかりのきせるにつめる

眞野たける

さらりと雪のすつきり富士のふき晴れて冬木一本
疎開してゆくにほうたるのあるいてゆく
さくら落葉も朝が水のやうな島山の空
明日は出船のしづかな波音とみんな寝てからのたばこぼん

梶本芦城

松山松の色杉山杉の色霧はれると日あたる
もくげ二つ三つ咲いて家が霧の中
鶏小舎で三羽外で二羽露草の花雨はれた
もう蚊帳を干さうかとおもふ萩の花こぼれ
時雨といふやうなパラパラと一枚は刈つてある田

印南健治

秋 雨 まる い 船 窓 が 灯 る
ひる月ランプのホヤをみがきます
ながあめはれた虹がなないろ
秋の白い雲と入谷淺草を見晴らす陸橋を渡り
月の明るさは石垣によせるさざなみ
南瓜が成つたことの話子供は疎開さしての暮し
草はみんな實となりお彼岸よいお天気となる

水野田々詩

鳴いて明けて畑の大根は二つ葉
焼け跡の落葉樹で芽をふき秋雨降つてゐる
川菅の水嵩の日ぐらしの鳴いてゐる櫛
雨の間の朝日すればすいっちらよの青さ

對馬幸二

朝も蟲鳴くすだれはまいたままの日が曇る
病む身秋が来てふとんの襦袢の秋の花かな
木屋匂ふほどはほるほると散り朝の日
色づいて来た南天の實よ今日は父が歸つてくる
秋はいつまでも降りやまない雨の坂みちの草
やつと降りやんで夕雲のいちぢくうれてゐる
ゆうべはつとめを戻る鳥が空を渡つてゆく
防空壕はいちなくて雨の二三日で大根やなつばやはえてゐる

石川舟洋

川下は堤に松の木製材所の静かなる音も秋日
二枚生えた口へ魚の摺り身

吉村廣子

野分の朝の草の葉のずたずたのやうなそんな心で
崖に萩の濡れてはれて山かつらです
學童通つて了ふと山寺へは稻木のこの道を行く
葉つげにゐて青蛙しづくする雨
鴉きて二羽となる屋根の空が秋

小野寺大葉子

丘から日の稻田明るうなつてゆく
島にふり海は降る雨の、けふも降る
上れば祠があそ向ふの丘もよい月夜となつてくる
晴れわたる平野のすつと札幌へ通ずる大川、夏
夕風や鮭ぶらさげてかへりくるなり
墓石に殘暑といふかけさし詣でる
杏の實赤い背戸から新聞借りてくる
今日は警戒兵として故郷から見える山の見えるところ

走内庭草

朝霧北岡

作業往来も日々の土手に野いばらのひそかな
 かへつてきて法衣きてこのごろやぶごうしの花
 新發意になつてはじめてのいてふもみぢ
 み佛おそがみて出でて日光の薊一輪
 また冬が、冬のみびしきは初めての焚火の秀
 マリヤがラザオの前におるお晝の音楽
 秋は透明なきびしさの縹雲が伊豆の山々
 牧水の歌碑も大分苔がついて松のおち葉
 コスモス復員してけふはお墓に
 秋、だんだんと一日中稲米機の音
 草は川瀬になびきおは黒とんば
 あの道もこの土手も幼いおもひ出のまんじゆしやげ
 少年犬をつれ空が青い道の、秋くさ
 東京行の汽車が矢のやうに早いまんじゆしやげ赤
 おもひごと、下駄に石をばさんでもどる
 訪へばここにも歸還した顔が笑ふてみぞそばの花
 通夜の雨あがれば葱の青々と明けてある
 いちじゆくもろうたつゆが置いてる
 嵐のあととしづかな蟻の歩みである
 水が水押してひるがつて流れてゆく秋
 燒跡測算してある秋風の風量、電車すいてある
 手巻のたばこで遅蒔きの胡瓜花つけとる
 老いては茄子焼くけむりあほいであるうちわ

妻鹿 奏

池原 修

伊藤 三瀧

藤村 龍平

鈴木 裸蟬

永田 二郎

廣田 不知火

花もなくて父の墓へ雪水にひいらぎを
 梢には旭さしてきて烟の霜一面

ひぐらし鳴き連るるあの山この山
 密柑の青い實のあたたかい山畑の道が城趾
 いもべたけのくろくる見える、と月が出づる

このごろ種のまきときですとラザオが云ふて秋、まの種をまき
 屋上に水まいて南瓜にも水やつて一日終り
 沖まで青空鯉船ぞくぞくと出る朝風につづき

朝は土じめりの種まく病み上りの妻で
 燈下きなこひいてなるにをりなり秋しぐれが通る
 ここでもまいてあるからりとばれた夕空

月夜の雲もない麥の芽
 こんや居待月が杉木立の上に、ここが病室
 雲の動きも秋空の高さも日本再建

墓標二つそこから見下す海は青くて秋
 燒土の菜園が青くなつてこのごろ日曜は休
 看護婦の白衣が向うに行つてしまふと秋の雲

遠山は紅葉風は冷たし臺に上り
 いちじゆく青い中の赤いのも雨の中
 シープの光が闇夜をはしる雨がふる

草の芽青くて川原の水の秋
 雨のあがつた秋茄子の鬚を旅に

飯田 恒夫

徳田 英夫

三井 澄雄

吉川 哲男

東 信太郎

栗田 千可志

佐藤 吟雨

梁瀬 阿羅與

安藤 鴻風

星野 明

佐々木 一男

伊達 宗勝

編輯後記

○本誌も本格的に万事が成つて来た。新投稿者の増加はすばらしいものがある。この傾向は喜ばれなければならない。一方、原稿紙の不足の爲にそこの紙切れに書いたもの、又、書きなぐられてゐる爲に判讀すら不可能のものが増加した。で、投稿規定には原稿紙へとしてあるが、普通の紙で結構であるから、文字だけは丁寧に清記してほしい。

○次に、投稿略規にもある様に「一月一稿一選者に限る」この規定に注意しないで、各選者へ同句を投稿する人がある、これは困るから特にこの點注意してほしい。但、俳句日本には黨派的對立はないのであるから、どこの選者へ投稿しようとするは差支へない。○従來からの本誌會員で、まだ住所の通知を延引してゐる人は御一報を願ふ。それから、申請ないことだが、陸社では購讀料臺帳の一部を焼失させたから、現在の發行所に移らぬ以前に拂込む方は御一報願ひたい。

投稿略規

○後記の初めにも書た様に、新人投稿者の増加は本誌發展に色々の意味で拍車をかけるものだ。で、新人向きの編輯方法を考慮しなければならぬが、一方、新日本建設と云ふ國民の意志により、俳句人も直接關與できるやうな仕事に就いては考慮しなければならぬ。この意味で、全自由律作家を吸合し、自由律俳句協會(假稱)の設立をいそいでゐる。目下世話人の會合も終へ、自からなる聲として一般に御報道申上げる日も近からうと思ふ。御協力を願ひたい。

○本誌をもつて今年も終る。昭和二十年は我々にとつて忘れることの出来ない年であつた。編輯の豫定では俳句界以外の詩壇、文壇の方々から稿を頂いて終りを飾るつもりのもが、間に合はなくて残念であつた。明年こそ本誌の計畫を十分實行に移し度く思つてゐる。又、地方同人から會員の住所名簿と云つたもの掲載を申込みれてゐるが、今少々お待を願ひたい。必要なのであるから善處するつもりである。終りに、愛讀者各位と會員諸君の御健康を祈り、益々自由律俳句の隆昌を切願致します。(止禪子)

投稿略規

○俳論、隨筆等、(なるべく簡潔なるもの)
○俳句日本作品(社選)
句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。
○選句録作品
萩原井泉水選のもの、神奈川縣大船町建長寺前萩原井泉水へ
中塚一碧樓選のもの、世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧樓へ
西垣卍禪子選のもの、足立區伊興町狹間八八七西垣卍禪子へ
○句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人、一月、一稿、一選者に限る事。
一、締切 毎月十五日
一、購讀誌代の拂込は従前通り舊各社の發行所宛に小爲替にて願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本社」へ送金せられたし。

本誌定價

一冊分 金一圓(送料)
六冊分 金六圓三十錢(郵送料)
十二冊分 金十二圓六十錢(同)
○前金(なるべく小爲替)で御拂込下さい。
○必ず何月號よりと御指定の事。
○御轉居の際に發送部宛御報下さい。

第二卷 第二號

昭和二十年十一月廿五日印刷納本
昭和二十年十二月一日發行

發行人 中塚直三
編輯人 西垣隆滿
印刷人 石上利雄
東京都立川市曙町三丁目五五番地
印刷所 行政學會印刷所 東京五

發行所 俳句日本社

東京都足立區伊興町狹間八八七
日本出版會 會費番號二五〇〇四
配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

圖一金價定